

石川県埋蔵文化財情報

第 12 号

巻頭図版（栄町遺跡、金沢城跡、加茂遺跡）

平成15年度の発掘調査をふりかえって ……谷内尾晋司（所長）…(1)

発掘調査略報

北方 B、北方 E、北方池の下遺跡（2 課） ……(6)

栗津カンジャバタケ遺跡（2 課） ……(8)

北河内マツリダ遺跡（3 課） ……(9)

三室トリ A 遺跡、三室トリ C 遺跡（2 課） ……(11)

小島西遺跡（3 課） ……(13)

栄町遺跡（3 課） ……(15)

新庄遺跡（2 課） ……(17)

加茂遺跡（1 課） ……(18)

谷内石山遺跡（3 課） ……(22)

専光寺養魚場遺跡（3 課） ……(23)

畝田 D 遺跡（4 課） ……(24)

金沢城跡（2 課） ……(26)

末松遺跡（4 課） ……(28)

小杉遺跡（3 課） ……(30)

九谷 A 遺跡（3 課） ……(32)

平成15（2003）年度下半期の遺物整理作業 ……企画部整理課…(34)

調査報告

赤浦大割遺跡 ……安 英樹（調査第4 課）…(38)

資料紹介

金沢市銚子町採集の瓦について ……柿田祐司（調査第1 課）…(47)

調査研究

石川県における磨製石包丁研究についての現状と若干の考察 ……松尾 実（調査第1 課）…(51)

2004年 8 月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

栄町遺跡

写真1 板塀完掘状況（西より）

調査区の西面及び南面において検出した二列の板塀である。板塀を伴う古代の建物群は、公的な施設や有力者の居宅と推定されており、県内では小松市佐々木遺跡、津幡町太田シタンダ遺跡などに類例があるが、七尾周辺では本遺跡が初出となる。

写真2 掘立柱建物完掘状況（北より）

今回の調査で最も大型の掘立柱建物である。7間×4間を数える南北棟で、各柱穴を溝によって接続する。大型の掘立柱建物は板塀内において全部で3棟確認している。



写真1 板塀完掘状況（西より）



写真2 掘立柱建物完掘状況（北より）

金沢城跡（旧県庁舎跡地）

写真1 3区 調査区全景（北西から）

旧県庁舎本館建物屋上から3区（東庁舎駐車場跡地）を撮影したものである。画面右上の広坂通りに並行するように堂形南縁外周水路を検出した。中央ロータリーの植え込みから手前に向かい、堂形造成土中から土塁の頂部が確認できる。

写真2 3区 土塁（北西から）

土塁の土層堆積状況である。礫の多く入る堂形造成土で覆われていた。頂部は粘質土層と砂層が互層に盛られていた。画面右側堀の土層からは、流水の痕跡が観察されている。



写真1 3区 調査区全景（北西から）



写真2 3区 土層（北西から）

加茂遺跡

写真1 弥生時代中期後半の周溝をもつ建物跡

主柱穴は4本で、拡張に伴う建て替えを1回行ったと考えている。拡張後の周溝の直径は約10mを測る。周溝からは弥生時代中期後半頃の土器と共に磨製石包丁が出土している。調査では、このほかにも数棟の周溝をもつ建物跡を検出した。

写真2 谷部で検出した古代の水田跡

7世紀代の集落が廃絶した後に造られた古代の水田跡である。いわゆる小区画水田といわれるものである。古代北陸道が敷設され、集落が移動したことにより水田化が行われたと考えられる。



写真1 弥生時代中期後半の周溝を持つ建物跡



写真2 谷部で検出した古代の水田跡

平成15年度の発掘調査をふりかえって

所長 谷内尾 晋司

平成15年度は、県内で71件、約140,000㎡の調査(県40件、約65,000㎡、市町村31件、約75,000㎡)が実施されております。ここ近年調査面積が減少気味でありましたが、今年度は昨年度(134,000㎡)に比較して、若干ではありますが、市町村で増加しております。これは、金沢市や近郊の野々市町、松任市などで新たに区画整理事業等が開始されたことによるものと思われます。

さて、今年度の調査成果の概要であります。県内各地でたくさんの新しい知見や貴重な調査資料を得ることが出来ました。主なものについて、北から順に紹介していきます。

能登地区では8市町村において、史跡の整備のための発掘も含め、25件の調査が行われました。

能都町の真脇遺跡では史跡整備のための調査が行われており、今年度の調査では、20年前の昭和58年に発見され、大きな話題を集めました巨大環状木柱列の隣接地が調査され、その全容が明らかにされました。また、珠洲市の粟津カンジャバタケ遺跡、北方E遺跡では少量ですが縄文土器が出土し、この地域の低地での縄文遺跡の存在が明らかになりました。

弥生・古墳時代では、この時代では、日本最大級の掘立柱建物群が発見され国指定史跡となった七尾市万行遺跡の調査が今年度も継続され、集落の実態があきらかにされつつあります。また、志賀町得田氏館跡では、弥生時代の竪穴住居跡や古墳時代の溝跡が確認されましたが、中世の館に関する遺構や遺物は発見されませんでした。

古代、奈良・平安時代では、七尾市栄町遺跡、羽咋市寺家遺跡をはじめ16遺跡が調査されました。昨年多量の斎串と呼ばれる祭祀(祓い、清め)に使用したと思われる木製品が出土し話題となった七尾市の小島西遺跡では、本年度もやや地点を変えたところから同様な木製祭祀遺物が集中して出土しました。また、能登では初めての人面墨書土器も出土しました。遺跡のある場所が海岸に近いことから、当時七尾付近に置かれたとされる能登の国府やその港である加嶋津に関する祓い所(祭りの場)であった可能性が考えられ、年代も8世紀から12世紀の長期間にわたることが明らかになりました。また、三室トリA遺跡では平安時代の土器製塩の炉跡が発見されました。

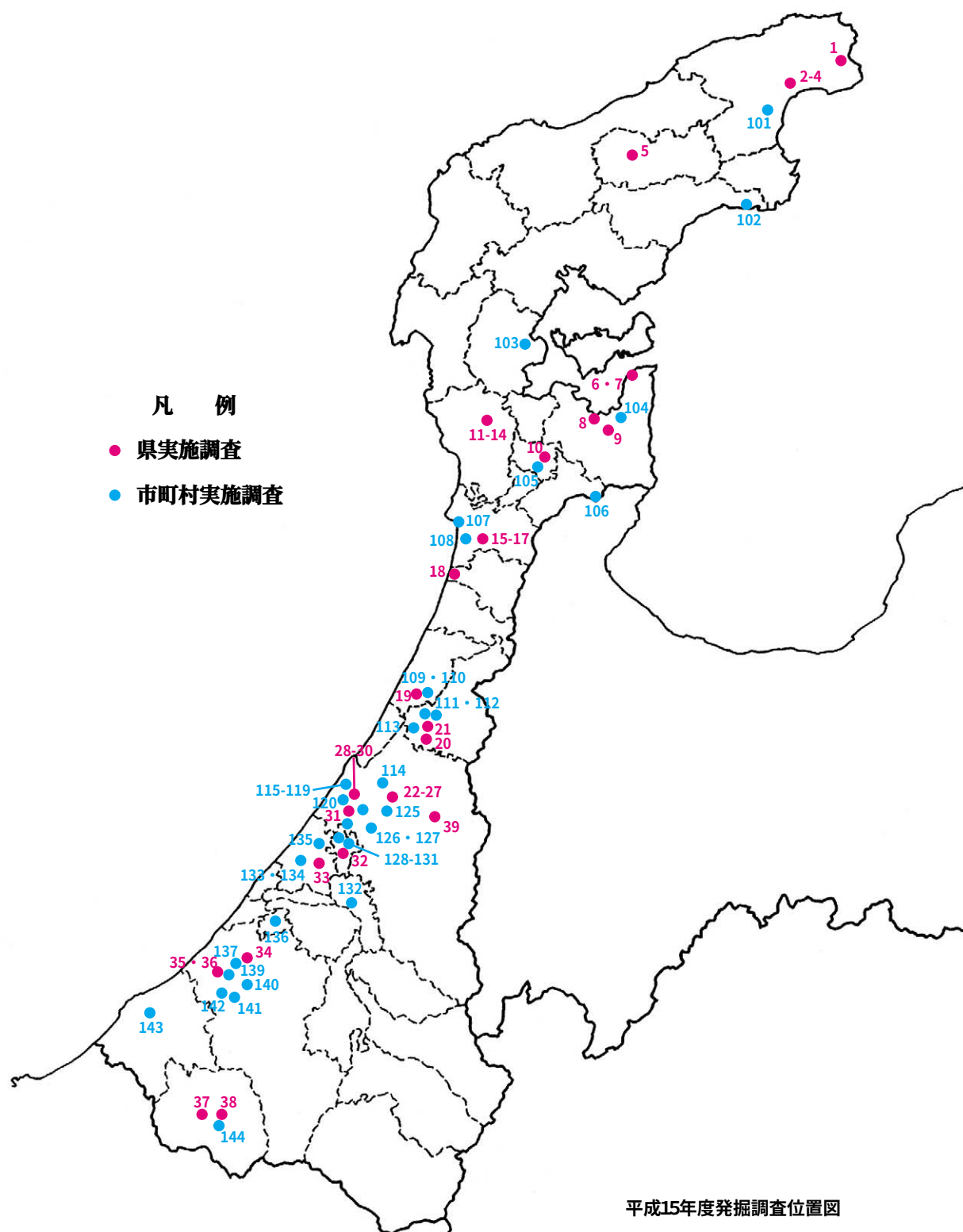
中世では、珠洲焼資料館を中心として、珠洲焼の柏原郷窯の前窯跡群の確認調査が継続して行われ、鹿島町の石動山では、前田利家との荒山合戦で知られる荒山口の砦跡や神主伝清水屋敷跡の調査が行われました。また、七尾市の三室トリC遺跡や鳥屋町新庄遺跡で、土塁や方形に巡ると思われる溝が検出され、武士の居館が所在した可能性が考えられます。

次に、北加賀地区(金沢市内および河北郡)では、3市町村で24件の調査が行われました。

縄文時代では津幡町加茂遺跡、北中条遺跡、畝田・寺中遺跡などで縄文晩期の土器が出土しており、従来、知られていなかった河北潟縁辺部などの低湿地での縄文遺跡発見が近年相次いでおり、農耕開始と



七尾市小島西遺跡出土の人面墨書土器
(左眉・左目と鼻、頭髮が墨で描かれている。半欠損。)



平成15年度発掘調査位置図

№	遺跡名	所在地	主な時代	調査原因	調査面積 (㎡)	調査期間	特記事項
1	粟津カンジャバタケ遺跡	珠洲市三崎町	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・室町	ほ場整備	200	10.14～11.7	
2	北方 B 遺跡	珠洲市上戸町北方	弥生・奈良・平安・室町	ほ場整備	890	7.15～10.16	
3	北方 E 遺跡	珠洲市上戸町北方	奈良・平安・室町	ほ場整備	同上	同上	
4	北方池の下遺跡	珠洲市上戸町北方	奈良・平安・室町	ほ場整備	同上	同上	
5	北河内マツリダ遺跡	鳳至郡柳田村北河内	縄文・鎌倉	ダム建設	600	11.17～12.19	中世墓
6	三室トリ A 遺跡	七尾市三室町	奈良・平安	ほ場整備	50	10.27～1.5	製塩遺跡
7	三室トリ C 遺跡	七尾市三室町	中世	ほ場整備	320	同上	
8	小島西遺跡	七尾市小島町	古墳・奈良・平安・室町	道路建設	2080	4.21～1.13	
9	栄町遺跡	七尾市栄町	古墳・奈良・平安・鎌倉	道路建設	3800	5.6～11.20	板場で区画された建物群。
10	新庄遺跡	鹿島郡鳥屋町新庄	古墳・奈良・平安・中世	河川改修・道路建設	2700	5.16～12.10	古代・中世の集落跡
11	館開テラアト遺跡	羽咋郡志賀町館開	奈良・平安・中世	ほ場整備	915	5.9～7.18, 11.4～12.19	
12	館開城跡	羽咋郡志賀町館開	奈良・平安・中世	ほ場整備	50	同上	
13	仏木新林遺跡	羽咋郡志賀町館開	縄文・古墳	ほ場整備	30	同上	
14	得田氏館跡	羽咋郡志賀町館開	弥生・古墳	ほ場整備	445	同上	
15	太田 A 遺跡	羽咋市太田町		道路建設	4800	4.22～9.17	
16	太田 A 遺跡	羽咋市太田町		ほ場整備	110	5.9～7.18, 11.4～12.19	
17	太田 B 遺跡	羽咋市太田町		ほ場整備	1070	同上	
18	今浜墓田山遺跡	羽咋郡押水町今浜	古墳・奈良	ほ場整備	560	9.4～10.6	
19	鉢伏浄水場遺跡	かほく市鉢伏	奈良・平安	ほ場整備	410	9.26～10.21	
20	谷内石山遺跡	河北郡津幡町谷内	奈良・平安	河川改修	650	10.2～11.4	畝溝
21	加茂遺跡	河北郡津幡町字加茂	縄文・弥生・古墳・古代・中世	道路建設	13500	5.7～2.10	弥生・古墳の集落と古代・中世の水田
22	金沢城跡 塋形	金沢市広坂	奈良・平安・安土・桃山・江戸	確認調査	2410	5.12～7.31, 10.1～1.5	絵図表記の遺構確認。 近世初頭の土塁と古代の面確認
23	金沢城跡 丑寅櫓東	金沢市丸の内	江戸	確認調査	同上	同上	東ノ丸東面高石垣に後続
24	金沢城跡 辰巳櫓南下	金沢市丸の内	江戸	確認調査	同上	同上	南北石垣、慶長後期の高石垣に先行
25	金沢城跡 三十間長屋	金沢市丸の内	江戸	確認調査	同上	同上	三十間長屋の創建が元和から寛永
26	金沢城跡 本丸附段	金沢市丸の内	江戸	確認調査	同上	同上	寛永8年大火以前の遺構面
27	金沢城跡 いもり堀	金沢市丸の内	江戸	確認調査	同上	同上	鯉喉櫓台石垣が寛文4年改修を確認
28	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西他	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町	区画整理	1120	7.7～9.3	
29	畝田 B 遺跡	金沢市畝田中	弥生・奈良・平安	区画整理	424	5.7～6.4	
30	畝田 D 遺跡	金沢市畝田東他	古墳・奈良・平安	区画整理	1906	9.24～12.15	ナベタ遺跡の東区画溝。地震痕跡
31	専光寺鯉魚場遺跡	金沢市専光寺町	弥生	道路建設	170	11.14～12.3	集落の中心部
32	末松遺跡	石川郡野々市町末松	奈良・平安	学校建設	10450	4.28～12.3	奈良の畠跡と平安の建物
33	幸明おとまる田遺跡	松任市幸明町	弥生・平安	用水整備	350	8.11～9.2	
34	大川遺跡	小松市大川町	室町・江戸	河川改修	1300	5.26～8.19	中近世の集落
35	矢田野遺跡	小松市扇原町	古墳・奈良	ほ場整備	870	7.7～9.25	オンドル住居
36	矢田僧屋古墳群	小松市月津町	古墳	ほ場整備	同上	同上	古墳2基
37	小杉遺跡	江沼郡山中町小杉	縄文	ダム建設	530		配石墓
38	九谷 A 遺跡	江沼郡山中町九谷町	室町・江戸	ダム建設	1600		屋敷地
39	キゴ山西丁場跡 A2 群 キゴ山西オクノタニ丁場跡	金沢市平等本町	江戸	確認調査	約700	9.1～10.31	石割工程の確認
101	柏原郷黨の前窯跡群	珠洲市宝立町柏原	中世	詳細分布調査	62	11.14～12.22	
102	真脇遺跡	鳳至郡能都町真脇	縄文	史跡整備事前調査	約300	6.9～11.14	縄文時代晩期環状木柱列
103	小牧白山社中世墓	中島町字小牧	室町	史跡範囲確認調査	300	7.22～10.15	室町後期中世塚1基と中世墓20基確認
104	万行遺跡	七尾市万行町	縄文・弥生・古墳・中世	土地区画整理	3450	4.9～3.31	12月から3月中断 縄文大当たり
105	良川北遺跡	鹿島郡鳥屋町良川	奈良・平安・中世	道路建設	270	7.4～10.22	
106	石動山	鹿島郡鹿島町石動山	中世(砦跡)	道路建設	150	6.16～7.24	石動山を防御する最後の砦の『荒山道2遺構』の確認調査
107	寺家遺跡	羽咋市寺家町	奈良・平安	遺跡範囲内容確認詳細調査	200	8.20～1.16	奈良時代平安時代の祭祀跡を確認
108	長者川遺跡	羽咋市兵庫町	弥生中～後期	道路建設	450	4.16～7.31	
109	鉢伏浄水場遺跡	かほく市鉢伏	平安～中世	道路建設	600	10.14～12.26	遺跡(有無・内容確認)の分布調査
110	鉢伏茶白山遺跡	かほく市鉢伏うの部73ほか	弥生	学術調査	110	5.29～11.10	遺跡指定に向けた確認調査
111	能瀬南遺跡	河北郡津幡町字能瀬・加茂	古墳・奈良・平安・中世	学校建設	約1,000	5.19～7.7	
112	加茂廃寺遺跡	河北郡津幡町字加茂	平安	詳細分布調査	約450	8.19～12.22	瓦葺礎石建物、鬼瓦・「鴨寺」墨書土器
113	北中条遺跡	河北郡津幡町字北中条	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	区画整理	約3,200	8.26～12.12	セイロ組み井戸
114	本町一丁目遺跡	金沢市本町1丁目	江戸時代	再開発ビル	500	9/9～12/10	
115	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西3丁目	弥生・古墳・平安～中世	民間開発	400	7/29～8/20	
116	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西2丁目	古墳・中世	道路建設	700	6/5～7/31	
117	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西4丁目	弥生～江戸	土地区画整理	7,700	6/2～7/31	川跡から多量の墨書土器
118	寺中 B 遺跡	金沢市寺中町	弥生・古代	宅地造成	268	11/13～12/10	
119	桂南遺跡	金沢市桂町	弥生～江戸	区画整理	1,220	6/2～11/28	
120	観音堂 B 遺跡	金沢市観音堂町	弥生～江戸	道路建設	867	8/11～10/14	
121	桜田・示野中遺跡	金沢市桜田町	弥生～平安	区画整理	4,300	6/4～11/28	柱掘方が大きい建物を検出

122	出雲じいさまだ遺跡	金沢市桜田町	弥生・古墳・平安	区画整理	900	10/14～12/18	
123	薬師堂遺跡	金沢市薬師堂町	弥生・古墳	区画整理	1,900	9/24～12/26	方形周溝墓を検出
124	下福増遺跡・福増カワラケダ遺跡	金沢市福増町南	弥生・古墳・平安～中世	工業団地造成	13,500	5/22～12/5	倉庫群を検出
125	片町二丁目遺跡	金沢市片町2丁目	江戸	道路建設	50	8/25～9/3	武家地・礎石と石組み井戸検出
126	窪二丁目遺跡	金沢市窪2丁目	弥生・平安	道路建設	750	5/10～7/31	
127	山科やなした遺跡	金沢市山科1丁目	平安・中世	道路建設	1,900	11/4～12/24	
128	三日月A遺跡	石川郡野々市町三日月町・二日月町	弥生・古代・中世	区画整理	16,800	4.2～1.20	
129	三納ニシヨサ遺跡	石川郡野々市町字三納	弥生・中世	区画整理	2,700	4.7～7.4	
130	三納アラミヤ遺跡	石川郡野々市町字三納	古代	区画整理	880	7.7～9.12	
131	藤平田ナカシンギ遺跡	石川郡野々市町藤平田	弥生・中世	区画整理	2,350	10.1～12.26	
132	舟岡山遺跡	石川郡鶴来町八幡町	安土・桃山	史跡整備			踏査のみ
133	北安田舟橋遺跡	松任市北安田町	弥生・奈良・平安	土地区画整理	11,000	4月～12月	
134	北安田五郎丸遺跡	松任市北安田町	弥生・古墳・古代	学校建設	4,200	6月～12月	
135	横江荘遺跡	松任市横江町	弥生・古墳・平安	工場建設	864	7月～8月	
136	秋常山古墳群	能美郡寺井町字秋常	古墳	史跡整備	約700	6.6～11.19	
137	幸町遺跡	小松市幸町・八幡町	室町・安土・桃山	道路建設	350	07.28～09.26	鍛冶中心の手工業生産集落
138	幸町遺跡	小松市幸町・八幡町	室町・安土・桃山	道路建設	1,000	07.03～11.12	鍛冶中心の手工業生産集落
139	狐山遺跡	小松市串茶屋町	飛鳥	個人住宅建築	211	09.01～09.18	集落遺跡
140	軽海横穴墓群	小松市軽海町	中世	道路建設	250	10.01～11.14	2基の浅い横穴
141	波佐谷城跡	小松市波佐谷町	安土・桃山	重要遺跡確認調査	51,000	10.20～03.26	一向一揆側の山城
142	二ツ梨豆岡向山窯跡	小松市二ツ梨町	奈良・平安	農地造成	100	05.09～09.18	須恵器窯跡2基重複
143	篠原遺跡	加賀市篠原町					
144	九谷A遺跡	江沼郡山中町九谷町					

は県実施発掘調査

太字は財団法人石川県埋蔵文化財センター実施発掘調査

の関係が注目されます。

弥生・古墳時代では、津幡町の加茂遺跡、金沢市の畝田・寺中遺跡、寺中B遺跡、桜田・示野中遺跡、福増カワラケダ遺跡などが調査され、平地式住居跡、掘立建物跡、溝跡、川跡などが検出されています。中でも、畝田D遺跡、畝田・寺中遺跡、桜田・示野中遺跡では、緑色凝灰岩製の管玉や石銅片などが出土し、石製装飾品を製作していたことが窺えます。また、弥生時代後期の高地性集落（山の上で営まれた防御性の強い集落）として知られるかほく市宇ノ気の鉢伏茶白山遺跡で範囲確認のための調査が行われ、山全体を取り巻く大規模な環濠が確認されています。



加茂廃寺跡の出土
鬼瓦（左）と「鴨寺」
墨書土器（右）

古代、奈良・平安時代では、津幡町加茂廃寺跡で、仏堂と考えられる礎石建物跡や「鴨寺」と書かれた墨書土器、鬼瓦などが出土し平安前期の古代寺院であることが判明しました。また、横江荘遺跡に隣接する金沢市福増カワラケダ遺跡で、掘立建物跡群とそれを区画する溝跡、道路跡が検出され、墨で顔や乳房を描いた全国的にも珍しい女性の人形や斎串が出土し、この場所が横江荘の荘家（管理するための役所）に伴う祭祀の場であった可能性が考えられています。桜田・示野中遺跡では、奈良時代（8世紀）の大型の掘立建物跡群が見つかっています。畝田・寺中遺跡で河川の跡が検出され、この川岸一帯に古代の遺跡が展開していることが確認されました。津と書かれた墨書も出土しており、湊に関する遺跡であることはほぼ確実であると思います。

中世および近世の遺跡では、金沢城跡の実態解明のための試掘確認調査が金沢城研究調査室により

本格的に開始され、今年度はいもり堀跡（旧テニスコート跡）、本丸附段跡（三十間長屋跡）と金沢城の石垣を切り出した「戸室石切丁場跡」、藩の米倉が置かれていた県庁跡地の調査が行われました。いもり堀跡の調査では、鯉喉櫓跡の櫓台石垣の規模などが明らかにされています。また、県庁跡地の調査では、堂形と呼ばれた蔵屋敷を区画する土塀跡や水路跡、辰巳用水の石管などが絵図等で推定されていた地点から検出されました。さらに、その下層には金沢城に先行する中世の土塁を持つ屋敷跡や奈良・平安時代に遺跡が存在することが明らかになりました。



野々市町三日市 A 遺跡で検出された北陸道
(人が並んでいるところは道路面で両脇に側溝がある)

金沢市以南の南加賀地区では、7市町村で、21件の調査が行われました。

縄文時代では、山中町の小杉遺跡の調査が今年も継続して行われ、縄文後期から晩期の大小の川原石を並べた配石遺構と住居跡が発見され、山間部での縄文時代の生活・文化を考えるうえで貴重な資料を得ることが出来ました。

弥生・古墳時代では、野々市町の藤平田ナカシンギジ遺跡、松任市の北安田舟橋遺跡などでは竪穴式住居跡、掘立柱建物跡が検出されています。小松市矢田野遺跡では、古墳時代後期のこのあたりの集落遺跡に特徴的に認められるオンドルを持つ竪穴式住居跡が検出され、矢田野借屋古墳群の一角をなしていたと思われる、墳丘を削平された古墳が発掘されております。

史跡整備に伴い平成13年度から調査が進められている寺井町の秋常山古墳群では、北陸最大級の規模を持つ1号墳が調査され、大きな後円部に対してやや小さく圧縮された前方部が取り付く、墳丘の形がほぼ確定されました。

奈良・平安時代では、野々市町三日市 A 遺跡で、その経路が不明な点が多かった古代北陸道の道路跡が発見されたことが大きな成果であります。また、松任市横江荘遺跡では、この遺跡では初めてとなる井戸跡が発見されました。小松市二ツ梨豆岡向山窯跡群が昨年引き続いて調査され、古代寺院の棟飾りに使用されたとされる「しび瓦」の破片が出土しています。

中世および近世の遺跡では、小松市の大川遺跡、小松城跡で、掘立柱建物跡や井戸などが検出され、中世村落遺跡の一端が明らかになりました。また、山中町では、古九谷の色絵窯と考えられる遺構が発見され国の史跡指定が検討されている九谷 A 遺跡の範囲などを確認するための調査が実施されました。中近世城館跡の調査では、加賀一向一揆の拠点として著名な小松市波佐谷城跡の本丸跡の確認調査が行われ、また、鶴来町でも、天正期の石垣作りの城として知られる舟岡山城跡の確認調査が開始されました。

以上、簡単に、県の埋蔵文化財センターおよび市町村で実施いたしました主な発掘調査の概要を紹介させていただきました。このように平成15年度もたくさんの新しい調査成果を得ることができました。しかし、これらのほとんどが、開発事業に伴う緊急発掘であり、記録して保存するための調査で、発掘調査の終了後は失われていく運命にあります。今後とも、埋蔵文化財情報誌や発掘調査報告会、「ふるさと考古学講座」など通して、できるだけ多くの発掘調査の成果等の情報を迅速に県民の皆様へ提供し、埋蔵文化財やその保護について、ご理解を深めていくことが大切であると考えています。皆様の一層のご協力ご理解をお願い申し上げます。

きた がた

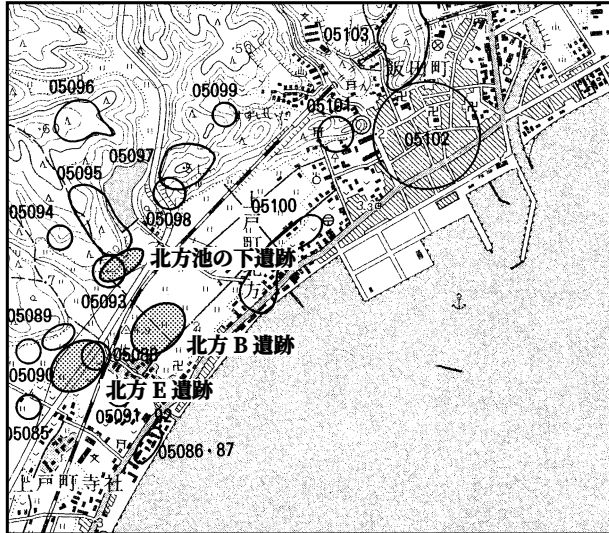
北方 B、北方 E、北方池の下遺跡

所在地 珠洲市上戸町北方地内

調査面積 890m²

調査期間 平成15年7月24日～同年9月10日

調査担当 本田秀生 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果メモ

- ・北方 B、北方 E、北方池の下遺跡は珠洲市上戸町北方地内に所在する。
- ・調査原因は県営ほ場整備事業上戸地区に係るもの。
- ・調査面積は北方池の下遺跡120m²、北方 B 遺跡470m²、北方 E 遺跡300m²である。
- ・北方池の下遺跡は縄文、古代～中世、北方 B 遺跡は弥生～中世、北方 E 遺跡は古代～中世の遺物が出土した。それぞれ、柱穴、溝、土坑等を確認した。

北方 B 遺跡、北方 E 遺跡、北方池の下遺跡は能登半島の先端、珠洲市上戸町北方地内に所在する。

遺跡は丘陵と海岸線の間に細長く延びる平地に立地する。

発掘調査は県営ほ場整備事業上戸地区に係るもので、排水路、およびパイプライン敷設工事にかかる部分が対象となり、北方池の下遺跡120m²、北方 B 遺跡470m²、北方 E 遺跡300m²を調査した。

北方池の下遺跡は縄文、古代～中世、北方 B 遺跡は弥生～中世、北方 E 遺跡は古代～中世の遺物が出土し、それぞれで、柱穴、溝、土坑等を検出している。

北方池の下遺跡 遺跡は丘陵裾に位置する。丘陵裾から海岸に向かって延びる排水路部分が調査対象となった。調査区海側は低地部となっており水田等の生産域と考えられ、明瞭な遺構は確認されなかった。先端部はさらに低くなっていくようで、南側に位置する北方 E 遺跡とはこの鞍部が境となるのかもしれない。丘陵側では古代の溝等を確認した。遺物は土師器、須恵器、珠洲焼、石器等が出土している。

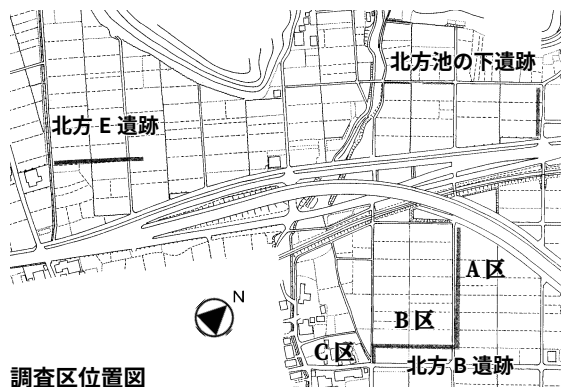
北方 B 遺跡 遺跡は丘陵と海岸線の間の平地に立地している。調査地点は、中世の建物等が確認された珠洲市教育委員会の調査地点の西側に位置する。クランク状の排水路部分が調査対象となり、海岸線に直行する A 区、その南端から西に折れ、海岸線と平行する B 区、その西端で南に折れる部分を C 区として調査を実施した。A 区では調査区中央付近で海岸線に平行する 3 つの鞍部が確認された。鞍部からは弥生時代から中世の土器、木製品等が出土している。調査区北端では柱穴、土坑等が確認され、居住域と考えられる。北側の鞍部は居住域とは溝を境とし、そこから緩やかに下がっていく。この鞍部の居住域に近い部分は生産域と思われる。中央鞍部と南側鞍部の間の微高地では中世の土坑、柱穴等が確認され、土坑からは鉄滓が出土している。南端では柱穴が散発的に確認されたに留まる。B 区は遺物が散発的に出土したに留まる。中央がやや低く、C 区に向かって高くなっていくことから、調査地点は生産域と想定している。C 区では柱穴、溝等が確認され居住域の一角と想定される。B、C 区の北西側に居住域が展開すると想定される。

北方 E 遺跡 遺跡は北方池の下、北方 B 遺跡の西側に位置し、丘陵と海岸線の間の平地に広がる。

珠洲市教育委員会の調査では掘立柱建物群などが確認され、珠洲郡衙との関連も想定されている。また、小河川を挟んだ西側には前年度調査された、寺社今社遺跡が位置している。珠洲市教育委員会調査地点より丘陵寄りの海岸線に平行する排水路部分300㎡が調査対象である。北方池の下遺跡・北方B遺跡が丘陵から海岸に向けて緩やかな傾斜を持つのに対し、北方E遺跡は飯田側から宝立側に緩やかな傾斜を持つ。調査区の両端は鞍部へと連続している。この間は柱穴、畝溝などが確認され居住域と生産域（畑地）と推定される東側と、杭列等が確認され生産域（水田）と推定される西側に分かれる。その境には板で護岸された溝が調査区を斜めに横切っている。この溝からは墨書土器が出土した。調査区からは主に古代～中世の遺物が出土しており、遺構の時期はこのころと推定される。

丘陵と海に挟まれたこの狭い低地部には今回調査された3遺跡の他にもいくつか遺跡があり、調査地点よりさらに海側にも遺跡が展開している。現在の地表面からは確認できないが、海岸線に沿って走る幾条かの砂丘があり、これら砂丘の後背湿地と、丘陵からの流れが錯綜し、当時はやや複雑な景観を呈していたと想定される。遺跡群はそのような環境の中で展開していたと考えている。

（本田秀生）



北方B遺跡 A区全景



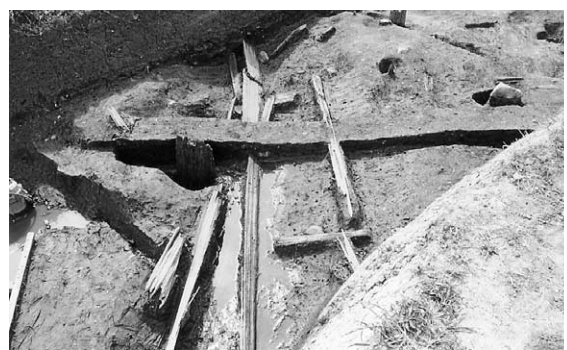
北方池の下遺跡全景



北方B遺跡・土坑他



北方E遺跡全景

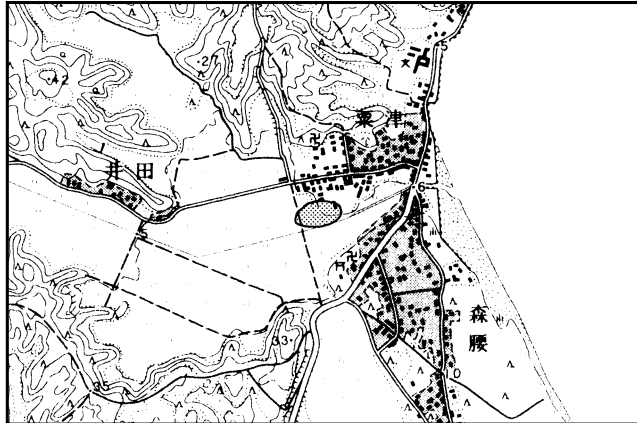


北方E遺跡・溝

あわづ
粟津カンジャバタケ遺跡

所在地 珠洲市三崎町粟津地内
調査面積 200㎡

調査期間 平成15年10月14日～同年11月7日
調査担当 本田秀生 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

本調査は県営ほ場整備事業粟津川地区に係る発掘調査である。

本遺跡は粟津川北岸の現粟津集落南西隅の畑地に立地する。1975年に試掘調査が行われており、立地している微高地が以前、海岸砂丘の一部をなしていたとの見解がなされている。標高1.8～1.9mを測り、地山は若干礫を含む黄橙色砂層である。調査区西側は攪乱であった。

古代の土坑1基と中世の溝を9条検出した。他にピット状の遺構も多数検出した

が、埋土・土層断面・底面の形状等から、木の根による攪乱穴ないし稲架穴の可能性が高いと判断した。土坑は中世の溝に切られた状態で検出した。円形を呈し、径1m、深さ40cmを測る。溝は概ね幅50cm・深さ20～40cmを測り、粟津川とほぼ並行に走るものが多い。当初は畝溝と考えていたが、深くしっかりと掘り込んであることから、それ以外の可能性もある。珠洲焼が数点出土しており、若干の時期差も確認している。

包含層からは縄文～中世の遺物が出土した。製塩土器も少量ながら出土している。 (谷内明央)



完掘状況 (東から)



完掘状況 (西から)



土坑 (古代)



遺物出土状況 (中世)

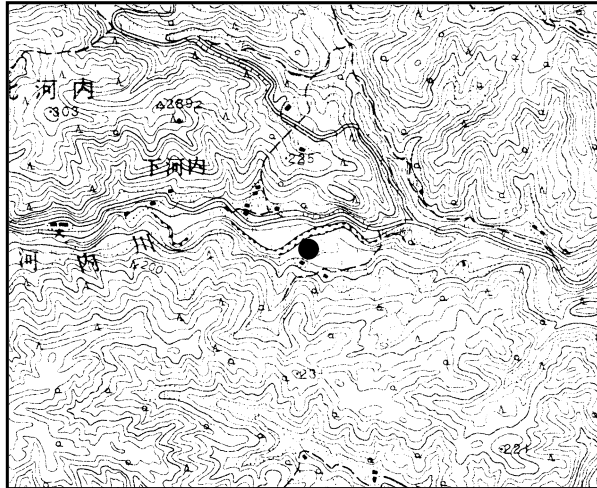
きた かわ ち
北河内マツリダ遺跡

所在地 柳田村北河内地内

調査面積 600m²

調査期間 平成15年11月17日～12月16日

調査担当 川畑 誠 伊藤雅和



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果の要点

- ・柳田村北河内地内に所在する縄文時代及び中世の複合遺跡で、河内川によって形成された河岸段丘上に立地。
- ・調査は町野川総合開発事業（ダム建設）を契機とする。
- ・縄文時代前期及び中期後半の流路や埋没谷、13世紀代の配石墓2基を確認。
- ・配石墓については、東向きの緩やかな斜面に自然石を用いて方形の区画を作り出し、その中央に蔵骨器を納めたもので、中世前半期の葬法を考える上で良好な資料である。

1号墓は、東西約1.4m、南北約1.2mの区画を配石によって作り出し、配石のほぼ中央に東西約0.6m、南北約0.8mの楕円形の土坑を穿つ。土坑内に珠洲焼甕を直立して納めて蔵骨器とする。内部にはおおよそ半分程度焼骨が残存していた。また、一個体分の珠洲焼鉢の破片が蔵骨器内に落ちていたことから、蓋として用いられていたものと考えられる。出土人骨同定の結果、頭骨、下顎骨、歯牙、椎骨、寛骨、中手骨、中足骨、指骨などが確認され、特に寛骨の全体に占める割合が多い。骨の大きさや厚さなどにより成人男性と推定されるとの同定結果を得た。

2号墓は、1号墓の南側に隣接し、配石の北面を1号墓の南面と共有する。南面は近年の耕地整理に伴う削平によって失われるが、東西約1.3m、南北0.9m以上の区画を配石によって作り出す。配石の中央付近にスリ鉢状の浅い土坑を穿ち、その中央に胴部上半の欠損した珠洲焼甕を直立して納めて蔵骨器とする。蔵骨器の直上には長方形の自然石を置くことから、蓋石として用いられたと考えられる。蔵骨器の内部には少量の焼骨が残存し、出土人骨同定の結果、頭骨、手根骨、指骨などが確認され、特に頭骨がほぼ全体を占めることから、意図的に頭骨のみを選択した可能性がある。頭蓋部縫合の状態より20代の男性の可能性が高いとの同定結果を得た。また、1号墓の被葬者との関連については明らかにし得なかった。

今回の調査では配石墓を除いて火葬施設などの関連遺構を確認していないが、蔵骨器を納めた土坑の埋土に多くの炭化物を含んでおり、若干の焼骨片も認められたことから、比較的近接した場所に火化施設が存在した可能性が高い。また、2基の配石墓の東側には拳大から人頭大の自然石の集積が認められる。区画や蔵骨器等は確認できず、また、遺物の出土も認められなかったため、配石墓との関連や性格は不明であるが、詣り墓等の役割を担っていた可能性がある。（伊藤雅和）



北河内マツリダ遺跡中世墓平面図 (S : 1/40)



配石墓検出状況



1号墓



2号墓



縄文時代完掘状況

三室トリA遺跡、三室トリC遺跡

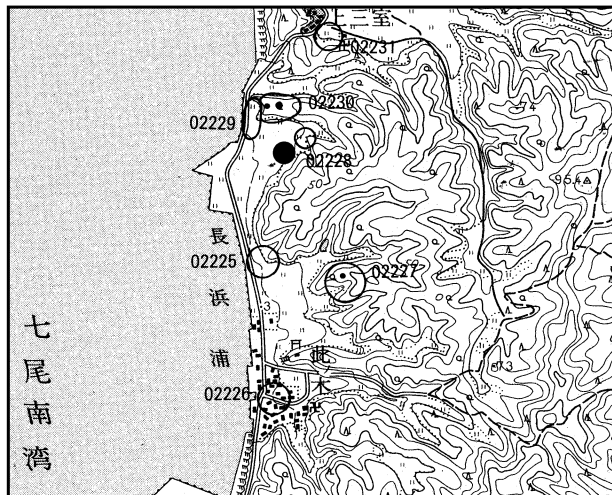
所在地 七尾市三室町地内

調査期間 平成15年10月27日～平成16年1月5日

調査面積 50㎡（三室トリA遺跡）

調査担当 和田龍介 林 大智

320㎡（三室トリC遺跡）



遺跡位置図（S = 1 / 25,000）

調査成果の要点

三室トリA遺跡

- ・9世紀代の製塩遺構を検出。
- ・製塩炉本体は検出されなかったが、複数の製塩遺構面を確認。

三室トリC遺跡

- ・土塁・堀等を一部確認。
- ・下層に弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構の存在を確認。

三室トリA遺跡・三室トリC遺跡は、七尾市北部の崎山半島西岸に所在する。遺跡は東から七尾湾に向かって緩やかに傾斜する丘陵の裾部に位置し、遺跡の北側には三室中世墳墓群や三室まどがけ古墳群が存在する。本調査は中山間地域総合整備事業(三室地区)に係る発掘調査である。

三室トリA遺跡

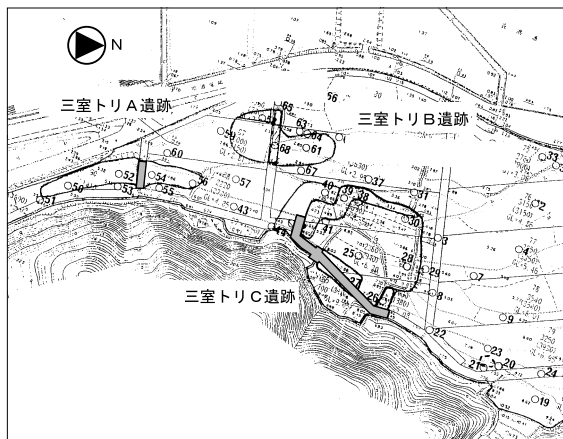
丘陵の中～下段の傾斜面に位置する。調査区南半で赤化した珪藻土粒を多量に含む面を確認し、掘り下げて製塩遺構が検出された。本来製塩遺構は南北方向にも拡がりを持っていたようで、斜面に直行する畦畔法面を精査すると北側にも50m程度の製塩層が確認された。

調査区内で検出された製塩遺構は、大きく東側（山手）の作業域と西側（海手）の土器・灰廃棄域に分けられる。作業域では明確な炉跡を確認するには至らなかったが、炉材として用いられた多量の被熱赤化した珪藻土塊が集中する箇所がいくつか確認された。また作業域は繰り返し操業を行っていたことが土層観察から明らかになっている。土層ではいくつかの整地面が観察でき、整地されていない面も含めると5～7面ほどの製塩遺構面が確認された。基本的には、炉の設置→製塩→破損した土器・灰の掻き出し→炉材の撤去→整地→炉の設置、というサイクルが想定される。整地に用いる土は丘陵の土（黄褐色粘質土）を掘削したものらしく、ある程度の面積にわたって整地するパターンと、炉の撤去に伴って生じた凹部を埋めならすパターンがあったようである。遺物は多量の細片化した製塩土器で占められ、そのほとんどが尖底タイプである。わずかに混入した須恵器杯は、鳥屋産と類似した胎土を持ち、9世紀代に比定できるものである。

三室トリA遺跡の製塩遺構は、県内でも類例の少ない複数面での製塩遺構を確認できたことに特徴が求められよう。

三室トリC遺跡

三室トリA遺跡の北東側、丘陵裾部に位置する。現況で3段の半円状に作り出されたテラス面と



遺跡の位置と調査区配置図 (S = 1 / 5,000)

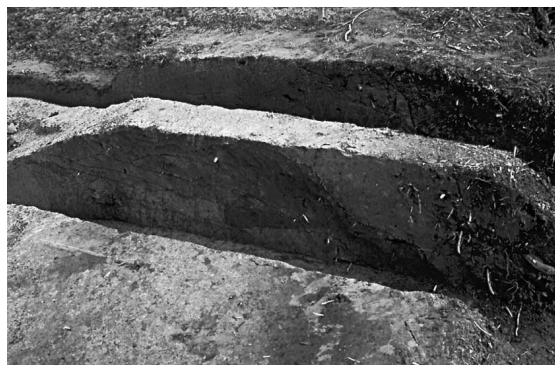
不明な点が多い。

本遺跡は平成16年度に館跡全域を対象としたトレンチ確認調査が行われる予定であり、遺跡の評価はそれを待つこととしたい。
(和田龍介)

土塁状の高まり、濠状の落ち込みなどが確認されたことから、中世の館跡と想定され調査が行われた。調査区は中段テラス面を南北方向に横断するように設定され、耕土直下に1面、下層に1面の整地面、最下層の地山面（弥生後半～古墳初頭の遺構面）の3面が確認された。中世面と想定された耕土直下の第Ⅰ面では遺構・遺物とも希薄であり、土塁状の隆起部は人為的形成か丘陵からの流れ込みによる形成なのかは判別が困難であった。またテラス面北側にある落ち込みは人工掘削の溝であることが確認できたが、その延びについては



三室トリ A 遺跡全景（東から）



三室トリ C 遺跡 土塁状遺構の断ち割り



三室トリ A 遺跡 製塩遺構の層



三室トリ C 遺跡 濠状遺構

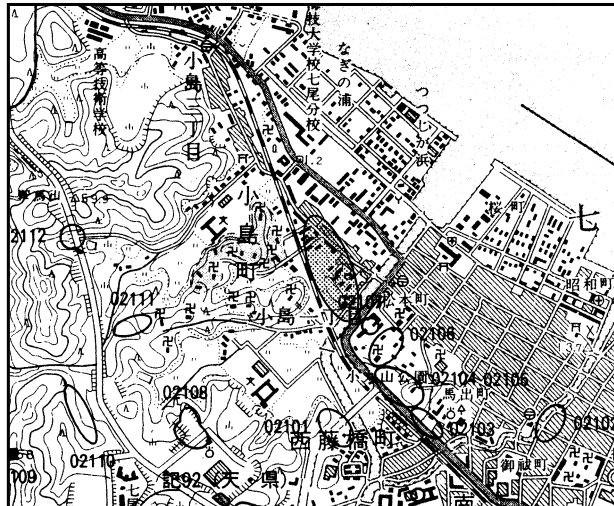
こ じ ま に し 小 島 西 遺 跡

所 在 地 七尾市小島町地内

調査面積 2,080㎡

調査期間 平成15年4月21日～平成16年1月13日

調査担当 大西 顕 横山 誠



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・ 8～9世紀の木製祭祀具が集中して大量に出土した。集中範囲は帯状に広がることが判明した。
- ・ これより海側の調査区で、11～12世紀の木製祭祀具が集中して出土した。本遺跡で行われていた祭祀が長期間にわたるものであったことを示す資料である。
- ・ 木製祭祀具が多数を占め、土器の出土量が少ない中で、9世紀代の人面墨書土器（土師器小甕）が1点出土した。
- ・ 16～17世紀の、掘立柱建物、井戸、溝を検出した。

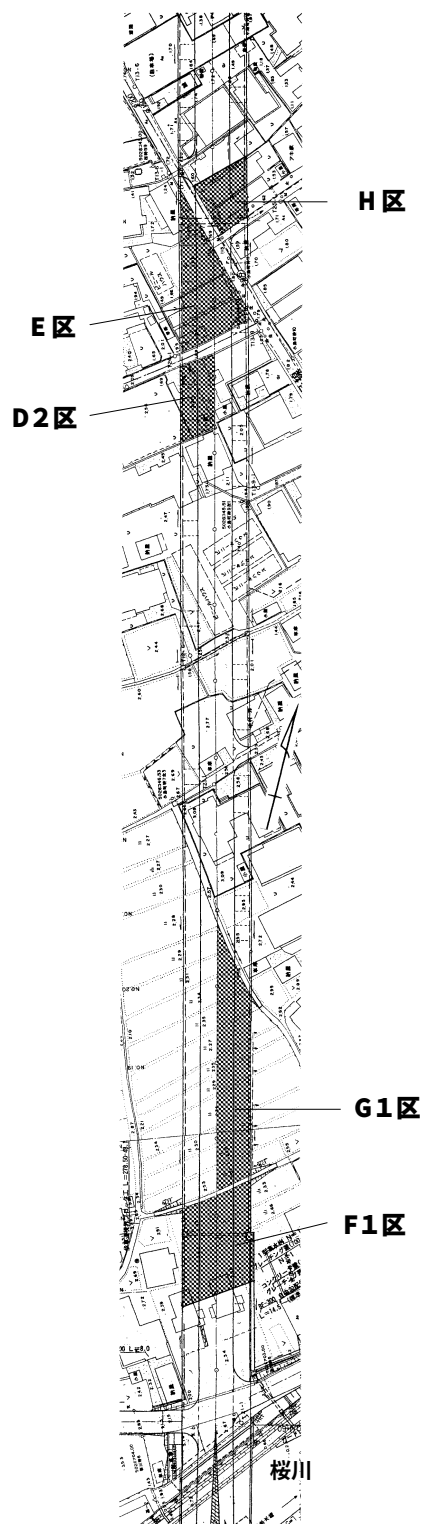
本遺跡は、能登半島の七尾湾岸に位置する古墳時代から近世までの遺跡で、平成14年度から調査を開始している。本年度は、D2区、E区、F1区、G1区、H区の調査を行った。

〔8～9世紀〕 D2区下層から木製祭祀具が集中して出土した。出土場所は標高0.8m 前後の平坦面である。集中範囲は帯状に、北側の調査区外にまで広がっている。種類としては斎串、人形、馬形、刀形、弓形、舟形等がある。全体として大型で、墨書されたものはない。また、人形は簡略な形態なものが多く、祭祀具の量が重視された可能性が高い。また、先端部を加工している棒状木製品（主に広葉樹材）も多数出土しており、これも祭祀具の一つと推定している。また、祭祀具集中範囲には多数の杭も打ち込まれており、祭祀具とどのような関連性があるのかが重要課題である。土器類は、木製品に比べ出土量が非常に少ないが、人面墨書土器が1点、木製祭祀具の集中範囲から出土している。9世紀代の所産と推定される土師器の小甕に墨書されたものである。

〔11～12世紀〕 H区下層から木製祭祀具が集中して出土した。祭祀具は薄い間層を挟んで上部と下部に分かれる。地形の傾斜に向きを揃える点や、自然木片の混入を伴う点はD2区と共通するが、杭は出土していない。上部祭祀具の共伴遺物である珠洲焼、土師器片等から上・下部の祭祀具は11～12世紀の遺物と推定される。木製祭祀具には人形、刀形等の種類がある他、漆器や竹、動物骨も含まれている。

〔16～17世紀〕 D2区上層、E区上層、F1区、G1区、H区上層から本期の遺構が多数確認されている。井戸には石組みの他に、木組みの井戸側も確認された。E区上層の石組井戸(SK161)では、覆土内から五輪塔が1点出土した。また別の石組井戸(SE3)では、宝篋印塔の一部を井戸側に転用しており、共に山の寺寺院群との関わりが注目される。

本年度の調査により、本遺跡が古代から中世初頭にかけて、断続的ながら長期間にわたり祭祀場として機能していたことが確認された。また、特に8～9世紀にかけては、祭祀具の出土量は膨大で、この「量」と「継続性」が、本遺跡の最大の特徴であると考えられる。 (大西 顕)



小島西遺跡調査区位置図
(S = 1/2,000)



木製祭祀具出土状況 (D2区下層: 8~9世紀)



人面墨書土器出土状況 (D2区下層: 9世紀)



木製祭祀具出土状況 (H区下層: 11~12世紀)

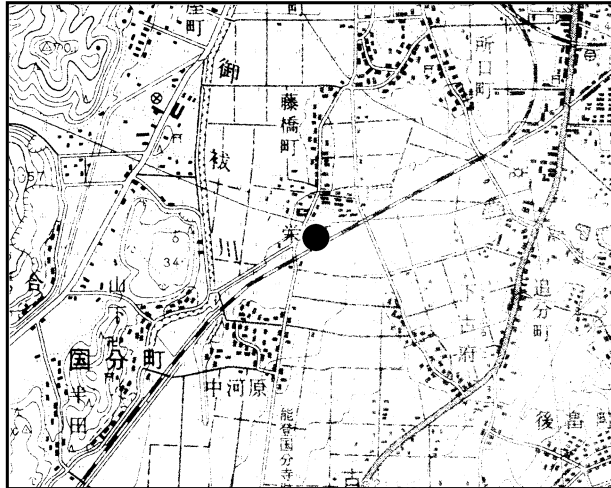
さかえ まち
栄町遺跡

所在地 七尾市栄町地内

調査面積 3,800㎡

調査期間 平成15年5月6日～11月20日

調査担当 川畑 誠 伊藤雅和



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果の要点

- ・七尾市栄町に所在する古墳時代～中世までの複合遺跡。石動・宝達山地を水源とする小規模な河川より形成された複合扇状地の先端部に立地。
- ・古墳時代の集落や奈良時代～平安時代にかけて存続した二列の板塀と複数の掘立柱建物群などの遺構を確認。
- ・板塀を伴う掘立柱建物群の性格として、調査地が能登国分寺に近接し、周辺が能登国府域に想定されることから、公的な施設あるいは在地有力者の宅地の可能性が推測される。

今回の調査では、主に古墳時代、奈良～平安時代、平安時代以降と3時期の遺構を確認した。奈良時代以降については古墳時代の包含層を切り込むが、今回の調査ではこの包含層を取り除き、同一面での調査を行った。以下、時期ごとの主要な成果についての概略を述べる。

古墳時代 調査地の西側を中心として、平地式住居、掘立柱建物、溝などの遺構を検出した。平地式住居は3棟を検出し、いずれも弧状にめぐる溝を伴う。掘立柱建物は2間×2間を数える総柱建物で、2棟を確認した。帰属時期は、古墳時代中期と考えられる。

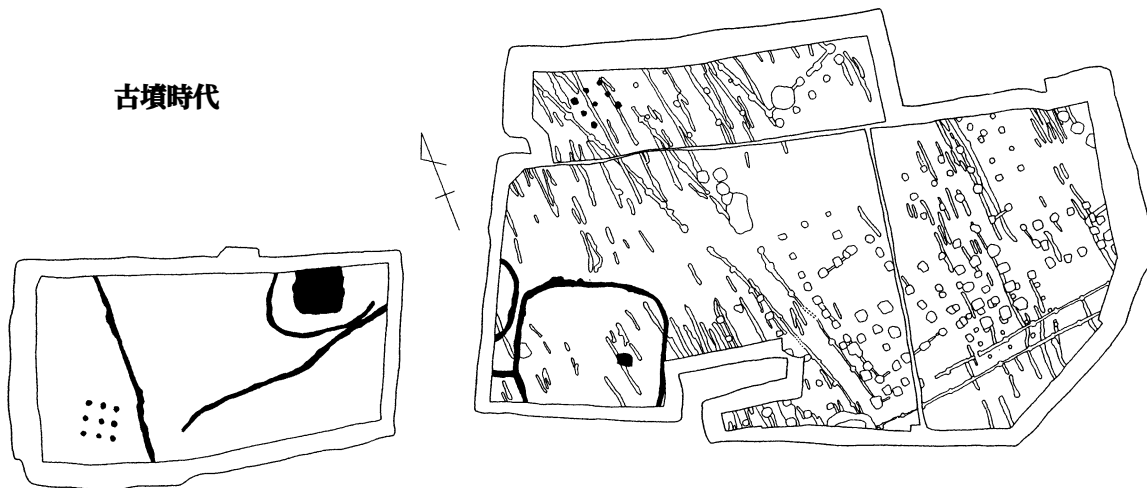
奈良～平安時代 調査地の東側を中心として板塀、複数の掘立柱建物などの遺構を検出した。板塀は、南面と西面を確認しており、内側と外側の2列がある。内側板塀と外側板塀の双方が同時に存在した可能性もあるが、外側の板塀のみに柱材が残存していたこと、また、西面では南面のように並行とはならず、北に至るほど内側と外側との間隔が開くといったことから、内側から外側への変遷も想定されよう。板塀の構造は、各柱穴の間をつなぐ溝底面の高さが一定ではなく、凹凸が認められることから、横板ではなく縦板を用いたものと想定される。

掘立柱建物は、板塀の内部からの検出が大半を占め、重複関係により4時期以上の変遷が考えられる。各柱穴を溝によってつなぐ特徴をもった大型の掘立柱建物は3棟確認しており、東西7間×南北4間、床面積86㎡が最大となる。この他、19棟の掘立柱建物を確認したが、2間×2間～3間×5間を中心とし、床面積は約20～40㎡を数える。各時期の実年代については、出土遺物が極めて少なく、また未整理のため詳細は判別し得ないが、概ね8世紀中葉～9世紀後半に収まるものと考えられる。

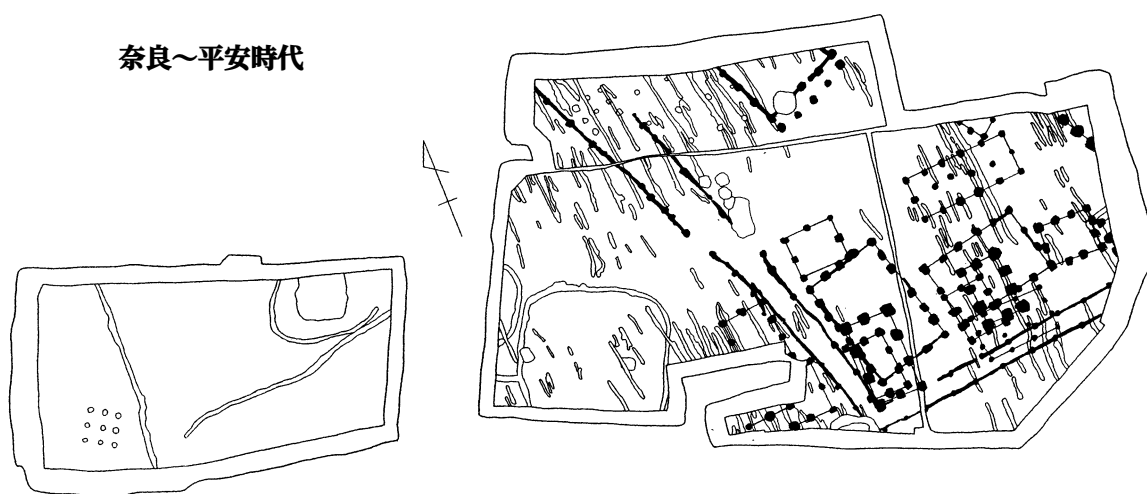
平安時代以降 調査地の全域において素掘り小溝を検出した。前代の板塀や掘立柱建物の廃絶後まもなくして、周囲は耕作地として利用されたと考えられる。その後、12世紀代の掘立柱建物や、曲物を枠に用いた井戸などを検出しており、短期間であるが小規模な集落が営まれたものと考えられる。その後は近代まで再び耕地として推移したようである。

(伊藤雅和)

古墳時代



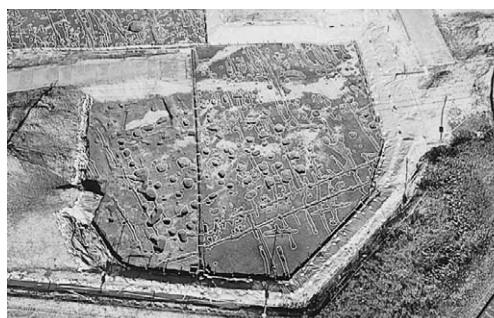
奈良～平安時代



古墳・奈良から平安時代主要遺構図 (S : 1 / 750)



調査区全景 (西より)



完掘状況① (南より)



完掘状況② (北より)



完掘状況③ (南より)

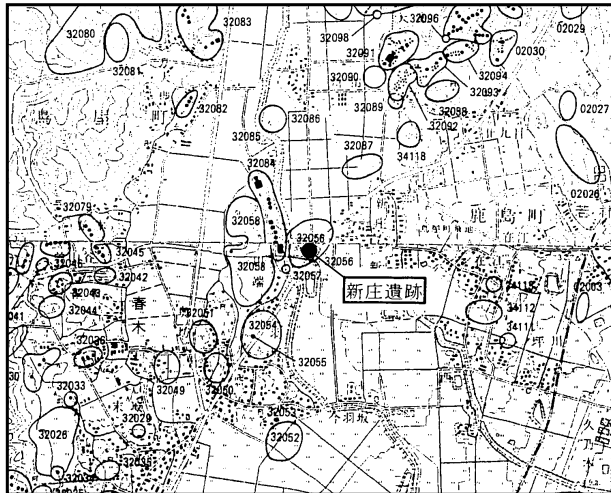
新 庄 遺 跡

所 在 地 鳥屋町新庄

調査面積 2,700㎡

調査期間 2003（平成15）年5月16日～12月10日

調査担当 白田義彦 荒木麻理子



遺跡位置図（S = 1 / 25,000）

新庄遺跡は邑知地溝帯北東部を流れる二宮川の北流によって生じた洪積台地上に立地する集落遺跡である。1987（昭和62）年と2001（平成13）年にも発掘調査が行われており、古墳時代から中世にかけての集落跡が確認されている。調査は県道七尾・羽咋線を挟んだ南北両側で行った。

県道以南では、ほぼ東西方向に流れる中世の区画溝を境として、南では古代の掘立柱建物2棟と井戸1基などを検出し、北では中世の掘立柱建物、井戸、溝などの遺構が集中しており、集落の中心域であったと思われる。

検出した井戸は十数基に及び、石組の井戸側

をもつもの、木組みの井戸側をもつもの、素掘りのものの3種類があった。また、掘り方の平面形にも円形と方形の2種類が見られた。その他に、古墳時代中期～後期の遺物がまとまって出土した不定形の窪みを検出したが、同時期の建物跡や溝などの明確な遺構は確認できなかった。

県道以北では、古墳時代中～後期の遺物を出土した河道と溝1条、古代～中世に属する十数条の溝を検出した他は、遺構密度が比較的薄く、井戸1基、少数の穴を検出したのみである。

今回の発掘調査では、特に中世の遺構が多数検出され、当時の集落の様子を窺い知ることができた。新庄遺跡は平成16年度にも調査があり、今回確認し切れなかった居住域の広がりや、河道の流路等について明らかにできると予想される。過去の調査結果とあわせ、新庄集落の変遷と全体像の復元が待たれる。

（荒木麻理子）



県道以南調査区（A・B区）

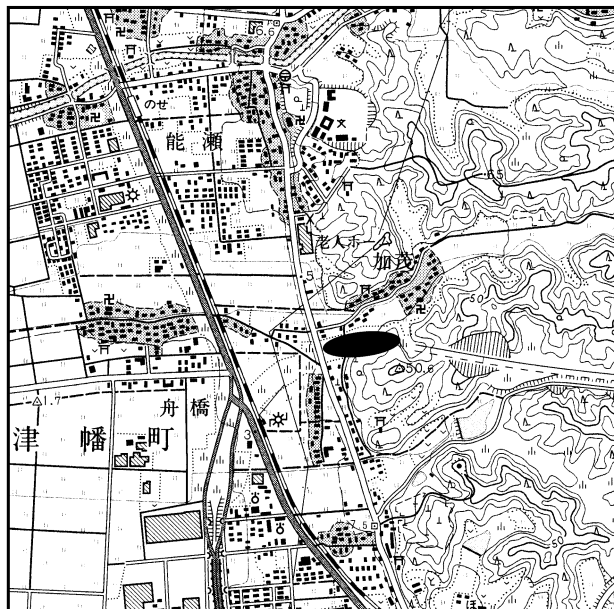


県道以北調査区（C・D区）

か も 加 茂 遺 跡

所在地 河北郡津幡町加茂地内
調査面積 23,750㎡

調査期間 平成15年5月7日～平成16年2月10日
調査担当 久田正弘 北川晴夫 柿田祐司
布尾和史 松尾 実 空 良寛
竹田麻里子



遺跡位置図 (S = 1/25,000)



調査区割図 (S = 1/5,000)

調査成果の要点

- ・縄文時代から中世に至る遺構や遺物を粗密はあるが確認した。本遺跡は、既調査で検出されている古代北陸道や加賀郡勝示^{ぼうし}札^{しきつ}の出土などから古代の官衙遺跡との印象が強いが、谷奥に向かうにしたがってその様相が少しずつ変化してきた。
- ・C・D・E・H区では弥生時代中期後半の周溝をもつ建物跡を検出した。
- ・I区では弥生時代後期後半の竪穴建物跡を検出した。
- ・弥生時代後中期から後期にかけて集落が平地から丘陵部へと移動していることが明らかとなり、何らかの変化に伴い当時の土地利用のあり方が大きく変わったと考えられる。
- ・F区では7世紀代の集落跡を検出し、古代北陸道成立以前の集落跡が、谷奥にあることが明らかとなった。
- ・F・G・H区では古代～中世の水田跡を検出した。
- ・古代北陸道に面する、ないしその西側は居住空間として利用し、谷部は水田という生産域となっていたと考えられる。これは古代北陸道の成立に伴い土地利用のあり方が変化したためと考えられる。
- ・古代・中世の水田の検出は、加茂遺跡における土地利用のあり方を窺い知ることのできる資料となった。(柿田祐司)

〔C区〕

C区は既往調査において第1面、第2面を調査しており、本年度はその下層（第3面～第8面）を調査した。以下に成果の概要を述べる。

第3面 東西方向の溝を検出した。弥生時代中期後半頃～古墳時代前期頃の土器が埋土から出土して

いる。

第4面 水田跡を一部検出しており、水流痕跡が畦畔を切っていることを確認した。

第5面 竪穴式建物、小穴、溝などを検出した。竪穴式建物については、建替えを行っていることが判明した。下部構造は、周溝を掘り込み、周堤を構築している。建替え時には拡張しており、拡張の際の埋土から白色系凝灰岩の磨製石庖丁と弥生時代中期後半頃の土器が共伴して出土した。また、それぞれ炉を伴い、支柱穴は4本となる。貼床^{はりゆか}から土器片、石鏃、剥片等が出土した。周溝からは多くの土器が出土している。時期は弥生時代中期後半頃に属する。

第6面 弥生時代中期後半頃の土器を包含する黒色層を除去した青灰色層の上面を調査した。平面円形状が隅丸方形にめぐる溝、土坑、小穴などを検出した。土坑からは弥生時代中期後半頃の土器が出土した。

第7面 水流痕跡を検出した。上層では洪水による砂層が調査区北側に堆積していたため、洪水源の河川が北側にあったと考える。時期は縄文時代晩期～弥生時代中期頃と考える。

第8面 自然流路と樹木根（自然木）、樹木痕跡、土坑、焼土遺構などを検出した。検出面直上からは条痕文の土器片が出土。時期は縄文時代晩期頃と考える。また、樹木根は上層中から出土している。樹種はヤマグワ、トネリコ属、エノキ属であり、溪谷林の様相を示している。なお、当該面より下層を確認するため5×20mのトレンチを設定してT.P. +2.1mまで掘り下げ、断面観察を行った。下層は上から順に青灰色層、明緑灰色シルト混じり粘土層、明緑灰色細砂混じりシルト層、灰色微砂・緑灰色細砂～中砂層、大礫を含む中礫層となることを確認した。（松尾 実）



C区：周溝内から出土した石庖丁

[D・E区]

D区は既往調査区の北側800m²を対象としており、第1面より下層を調査した。E区は新規の調査地である。調査の工程上又便宜上、調査区壁面の土層観察をもとに同一面にそろえて調査を行ったため、調査面の名称は異なる。以下、D区第2面・E区第1面、D区第3面・E区第2面、D区第4面・E区第3面、D区第5面・E区第4面としてまとめて呼称し、成果の概要を述べる。

D区第2面・E区第1面 溝、竪穴式建物、土坑などを検出した。溝は隣接地であるC区第2面で検出した溝の延長が確認され、北方向へ角度を変え伸びていくことが判明。竪穴式建物は方形で溝が埋まった後に構築している。支柱穴は4本で、床面からは弥生時代後期頃の壺底部片が出している。

D区第3面・E区第2面 溝、縦板列、竪穴式建物などを検出した。溝はC区の第3面で検出した溝の延長であり、これも上層同様に北方へ角度を変え、伸びる。縦板列は、弥生時代中期



D・E区：周溝を持つ建物跡検出状況

後半以降～弥生時代後期頃に属すると考える。平面形は、隅丸のL字形を呈しているが、南側では、二股に分かれる。内外を遮断していたと考える。周溝をもつ竪穴式建物については、3棟検出した。いずれも周溝の南東側は掘りこんでいない。周溝からは石庖丁（板状横刃形石器）、土製錘、弥生時代中期後半頃の土器などが出土している。建物のうち、2棟は主柱穴が4本で、周堤が一部残っている。建替えなどはなかった。

D区第4面・E区第3面 溝、土坑などを検出した。土坑から弥生時代中期後半頃の土器が多く出土した。

D区第5面・E区第4面 この面については縄文包含層の状況から、遺構の存在が極めて薄いことが予想されたため、東西2箇所¹に5×20mのトレンチを設定して調査を行った。東トレンチ、西トレンチと呼称する。いずれも縄文包含層の下面を対象にして調査を行った。東側では、遺構は確認できなかった。一方の西側では断面観察により、北側に落ち込みのあることがわかり、その下位から条痕文土器（縄文時代晩期頃相当）が出土している。（松尾 実）

〔F・G・H区〕

遺跡の中央やや東よりを南北に貫く農道から東側の地区では、F・G・Hの調査区に分割して調査を行った。それぞれの調査区で1面を中世、2面を古墳時代から古代、3面を弥生時代から古墳時代、4面を弥生時代中期、5面を縄文時代とし5つの面が確認された。今回の調査では、F区は1・2面、H区は1面、G区は1面から5面の調査を行い、それぞれの面より下層は来年度以降の調査とした。

F区では、中世および古代の畦畔で区画された水田を検出した。水田区画は方形またはややいびつな方形で区画されている。古代の水田が一辺4～6m、中世のものが10m前後と区画が大きく変わっている。また古代の水田を検出した直下の層では集落跡が発見されている。調査区の北東から南西に7世紀代の溝が流れており、流路の南側山よりの斜面では竪穴式建物跡1棟、掘立柱建物跡5棟、溝、小穴群等²を検出した。掘立柱建物跡柱穴からは良好な状態で礎板、柱痕が発見されている。遺物は、ほぼ完形になる須恵器の大甕をはじめ土師器、木製品などが出土した。

H区では中世の水田を検出した。F区に隣接しており、F区で検出された中世の水田と同様のものである。



F区中世の水田面



F区古代の水田面



F区古墳時代の掘立柱建物跡

G区では中世、古代の水田面を検出し、弥生時代の建物跡を検出した。中世の水田面はF区、H区で検出されたものと同様と考えられ、古代の水田もF区のものと同様と考えられる。弥生時代中期の遺構面では水田跡は確認されなかった。建物跡の埋土、建物内の土坑の埋土、建物外の小穴の埋土は花粉分析、植物珪酸体分析などの自然化学分析を行った。その結果、近辺で稲作が行われていたということが考えられる結果が出ている。

3つの調査区の成果から古代の加茂遺跡の縁辺部が水田であったことがわかる。加茂遺跡が駅家関係の施設であった前後の時代の遺跡の周辺景観が復元できたことが大きな成果といえる。

(空 良寛)

〔I区〕

調査区南東側の丘陵部に位置し、平成12年度調査マメダン山地区の南・南西側にあたる。マメダン山地区は中段には広い平坦面を持ち、頂上へ向かうやや急な斜面と頂上部からなる。I区は中段の平坦面裾から頂上部にかけてであり、2棟以上の竪穴式住居と柱穴群、数基の土坑を検出した。竪穴式住居は共に弥生時代後期後半であり、頂上部に1棟、中段部と丘陵部の変換点に1棟を確認した。頂上部の竪穴式住居では3方に溝が残っており、幅約11mである。頂上側の溝周辺に土器などが多く出土し、やや細身であるが完形の蛤刃石斧が出土した。中段部の竪穴式住居は、丘陵側を一部削りだした土を斜面側に盛って竪穴式住居を作り出している。平成12年度に検出された竪穴式住居の一部であり、数棟が切りあっているようである。頂上部には、方形の土坑があり、検出した際に、窪んだ覆土上面には焼土痕が2箇所と土器が出土しており、土坑墓の可能性もあろうか。また古墳時代中期と思われる土坑も存在する。

(久田正弘)



I区遠景



I区遠景 (F区水田部より)



頂上部全景



中段部竪穴式住居

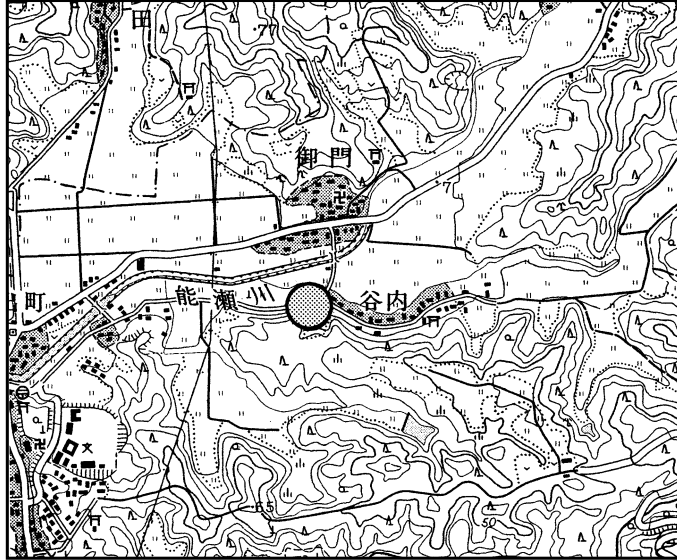
やちいしやま 谷内石山遺跡

所在地 津幡町谷内地内

調査面積 650㎡

調査期間 平成15年10月2日～同年11月4日

調査担当 岡本恭一 澤辺利明



遺跡位置図 (1/25,000)

谷内石山遺跡は能登半島の基部に当たる津幡町に所在する。今回調査を行った箇所は、1980年、1990年に町教育委員会が発掘調査を行なった丘陵から能瀬川に向かってのびる舌状台地の末端部である自然堤防上に位置し、調査原因は堤防の改修工事である。

町教委の調査では弥生時代末から古墳時代にかけての遺構を検出した。

調査区は幅5m長さ130mという細長いもので東半部と西半部に便宜上分けて調査を行なった。

調査区のうち、東半部は後世の開墾等によるものか大幅な削平を受けており遺

構、遺物は希薄であったが、西半部では幅約20～50cm、深さ10cm前後の溝十数本並走して検出され、奈良時代後半から平安時代前期の土器が出土した。これらの溝は類例からみて畑作にともなう畝溝の可能性はある。
(岡本恭一)



遺跡完掘状況 (西から)

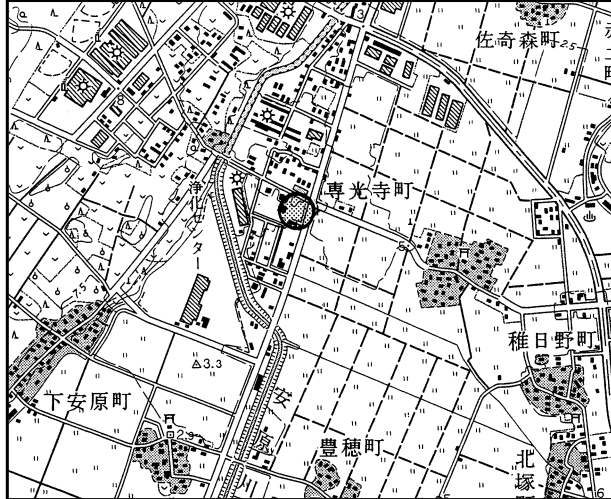
せんこうじょうぎじょう 専光寺養魚場遺跡

所在地 金沢市専光寺町地内

調査面積 170㎡

調査期間 平成15年11月14日～同年12月3日

調査担当 岡本恭一 澤辺利明



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

金沢市街地西部に位置する本遺跡は、海岸砂丘に沿って形成された後背湿地に面し立地するとみられる。平成3年(1991)、金沢市教育委員会により隣接地で発掘調査が行われており、良好な一括資料の出土から、弥生時代各期の遺跡が分布する当地にあって、中期後葉を代表する遺跡の一つとされている。

主要地方道松任宇ノ気線 歩道整備工事に伴う今回の発掘調査では、耕土直下で掘立柱建物1棟以上、溝3条、土坑2基などを検出した。

調査区北端に位置する土坑(SK01)は直径約120cm、深さ

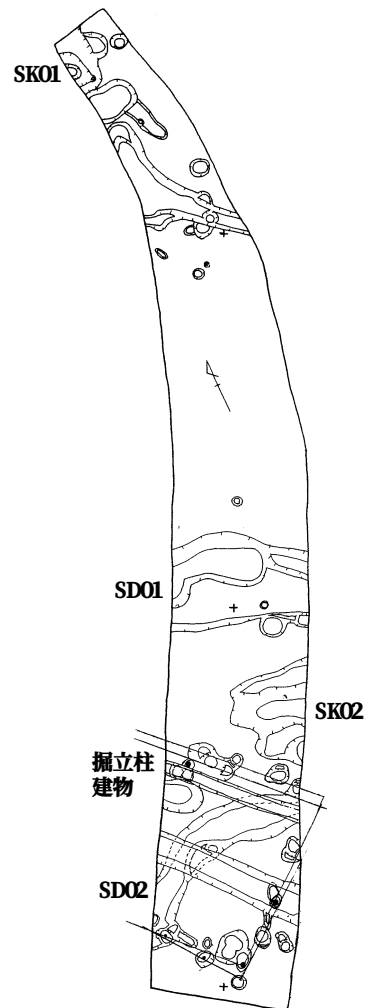
約70cm。検出面で不整形円形、底面で方形を呈し井戸の可能性もある。調査区南端で検出された掘立柱建物は3間×2間以上、3本の柱根が遺存し、接して存在するピットからみて建て替えが行われているようである。掘立柱建物周辺の溝(SD01・02)や不整形方形の土坑(SK02)からは細片が多いものの弥生時代中期後葉の土器が多量に出土している。

調査の結果、SK02などは市教育委員会検出土坑と一連の遺構とみられ、今回、さらに掘立柱建物柱根が検出されたことで、包含層まで至る大幅な削平を受けながらも、周囲に良好な集落跡の広がることが確認されたといえよう。

(澤辺利明)



完掘状況



調査区全体図 (S = 1/200)

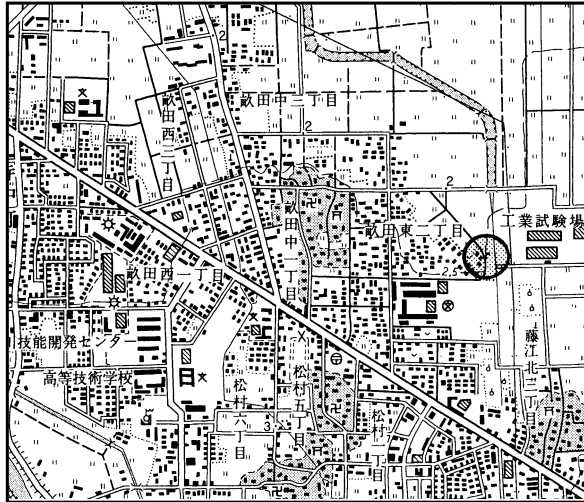
うねだ 畝田D遺跡

所在地 金沢市畝田東2丁目
藤江北4丁目地内

調査期間 平成15年9月24日～12月15日

調査担当 安 英樹 渡邊大輔

調査面積 1,906㎡



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は金沢市北西部の沖積平野に立地する。
- ・遺構面の標高は約3mである。
- ・調査原因は金沢西部第二土地区画整理事業である。
- ・検出遺構には竪穴系建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝、土坑、砂脈(地震痕跡)などがある。
- ・出土遺物には土師器、須恵器、石製品、木製品などがある。
- ・時代は主に古墳時代前期と奈良・平安時代である。
- ・性格は古墳時代の玉生産集落、奈良・平安時代の官衙関連遺跡である。

畝田D遺跡は平成14(2002)年度から現地調査に着手しており、平成14年度は遺跡の南半部分を調査し(『石川県埋蔵文化財情報』第10号 平成15年刊)、今回(平成15年度)は北半部分を調査している。今回の調査区北端は畝田ナベタ遺跡の平成14年度調査区(文献は前掲したものと同一)と接する。今回の調査により、事業地外を除く遺跡の全体像をほぼ把握することができた。

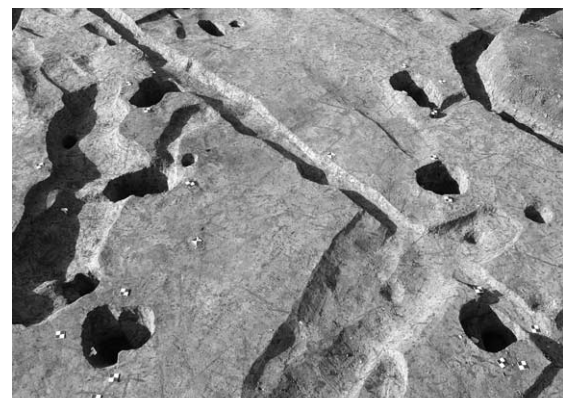
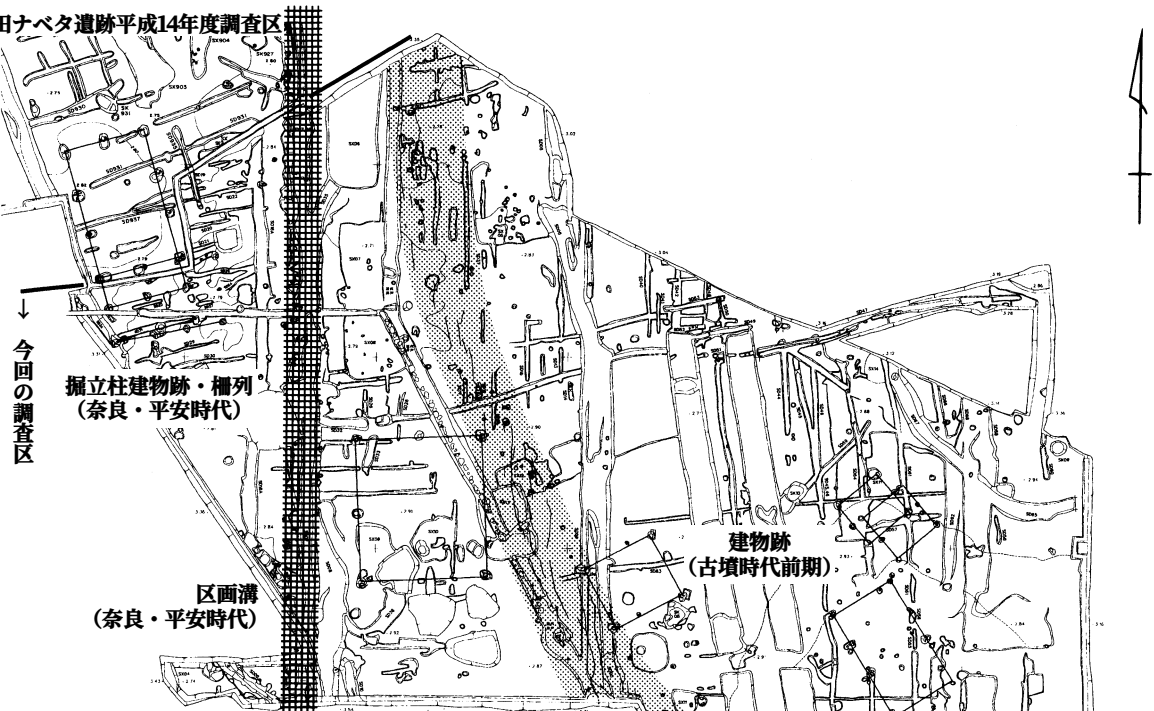
古墳時代前期の遺構は主に竪穴系建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝が検出され、遺物は主に土師器、石製品が出土している。竪穴系建物跡は基本的に1×1間の柱穴配置であり、周溝が遺存するものと、遺存せず削平されたと推定できるものが存在する。掘立柱建物跡は1×2間ないし1×3間の柱穴配置である。ただし、1×2間で周溝が遺存する建物跡や2×2間の建物跡も存在し、それらの構造については今後に検討が必要である。石製品は管玉未成品の形製品から研磨品まで各生産工程のものが出土している。これら遺構・遺物は調査区内に散在するが、平成14年度調査区も含む遺跡の南半部分により濃密な分布状況を示す。性格としては古墳時代前期の玉生産集落と推定できよう。

奈良・平安時代の遺構は主に掘立柱建物跡、柵列、溝が検出され、遺物は主に土師器、須恵器が出土している。掘立柱建物跡は畝田ナベタ遺跡で検出されたものと同一であり、その底部分と判明した。柵列は東西方向のもので、この建物に近接して走る。溝は幅1m前後を測る南北方向の大溝が検出されており、この時期の遺構が前述した掘立柱建物跡や柵列も含めてその西側にしか展開しないことから、区画溝と推定される。遺物は、大溝から多く出土しているが、「東〇」「高市」といった平安時代の墨書土器が含まれる。これら遺構・遺物は遺跡の北西部分に分布が限定され、内容も畝田ナベタ遺跡と共通性が高い。性格としては畝田ナベタ遺跡と一体的な官衙的様相を持つ遺跡と理解される。

この他では、北北西・南南東方向の砂脈群が検出され、過去の液状化現象を示す地震痕跡と判明した。砂脈群は調査区を縦断して断続しており、遺構との前後関係からは奈良・平安時代から近世の間に地震が起こったことを実証する資料となる。

以上から、畝田D遺跡については時期・性格の異なる遺跡が重複しており、従来把握されている範囲内で完結する性質のものではないことが判明した。今後、畝田ナベタ遺跡など周辺の遺跡も含めてより巨視的・多面的に遺構・遺物の分布や遺跡の性格を論じていく必要があろう。(安 英樹)

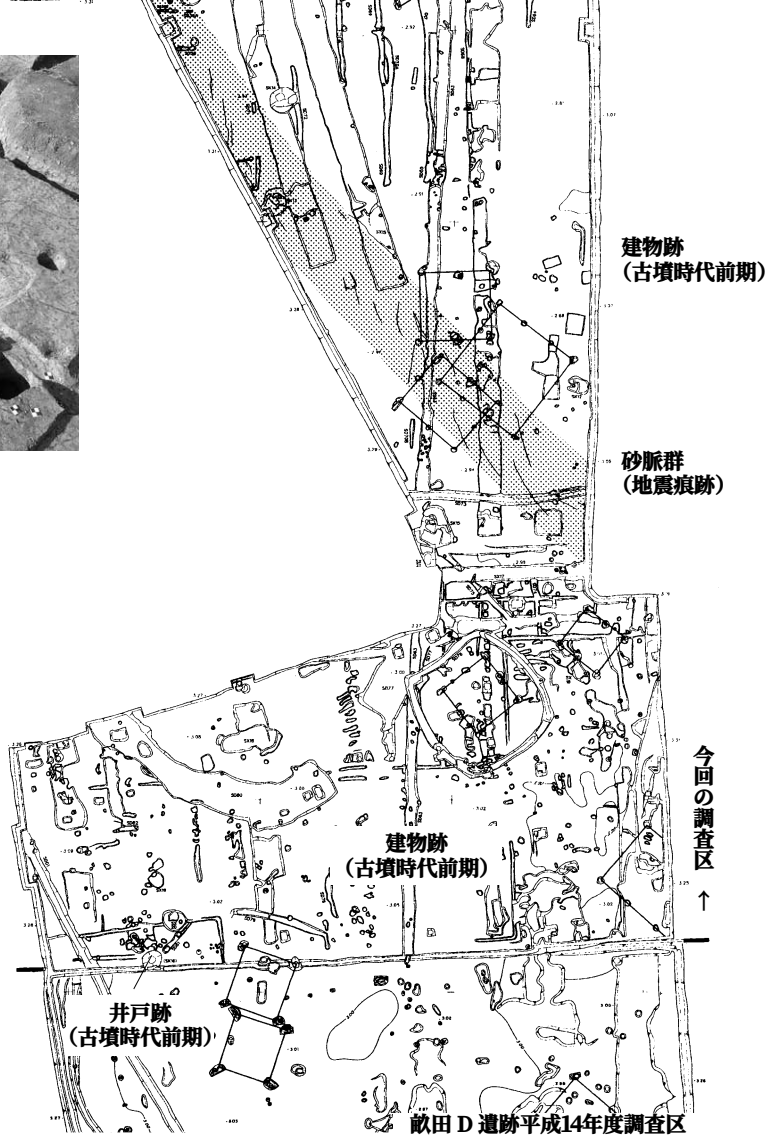
畝田ナベタ遺跡平成14年度調査区



古墳時代前期の掘立柱建物跡



奈良・平安時代の区画溝



畝田 D 遺跡平成14年度調査区

調査区全体図 (S = 1 / 400)

かなざわじょうせき
金沢城跡

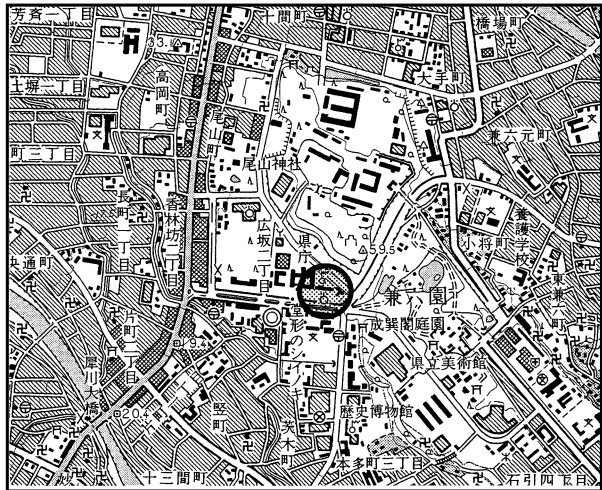
所在地 金沢市広坂2丁目地内

調査面積 2,410m²

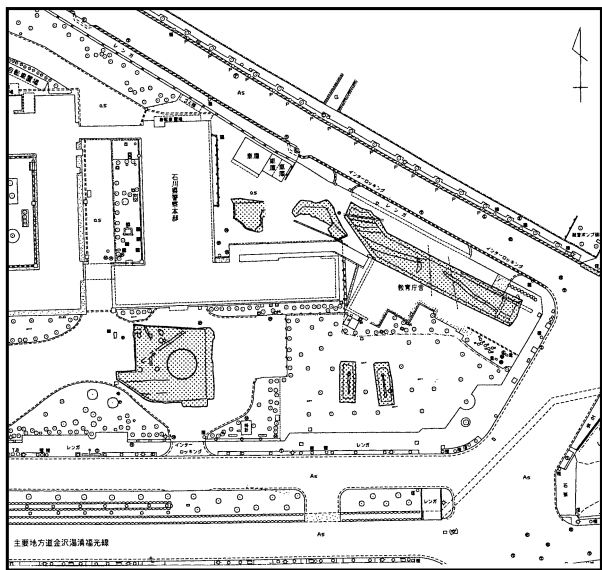
調査期間 平成15年5月12日～7月31日

平成15年9月1日～12月25日

調査担当 松山和彦 伊藤さやか



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 2,000)

調査成果の要点

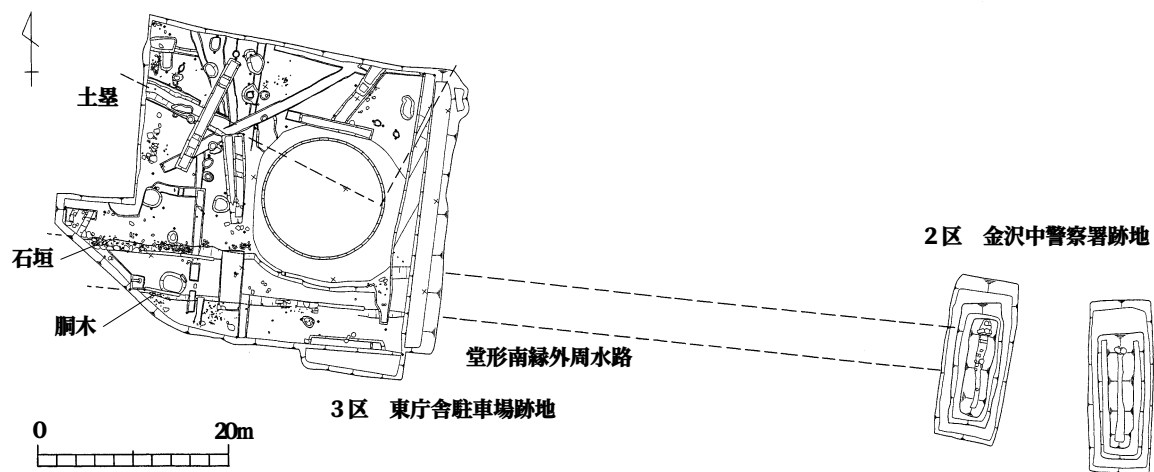
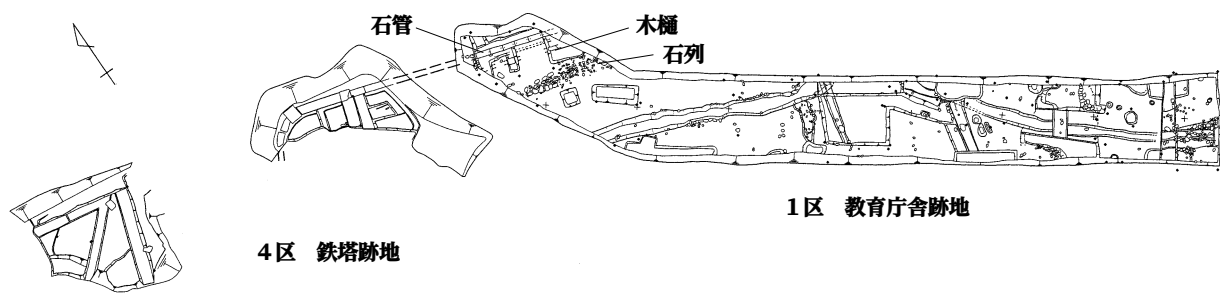
- ・辰巳用水の分水流（木樋・石管）と、それに平行する土塀基礎を確認した。
- ・寛永の大火（1631）年による米蔵の焼失を確認した。
- ・堂形^{どうがた}周辺の大規模な造成は、慶長～元和年間頃と判明した。
- ・堂形造成土で埋められた土塁や堀を検出した。
- ・現地表面下1.6mで古代の包含層をした。

県庁舎跡地（金沢市広坂2丁目地内）の教育庁舎跡地（1区）、金沢中警察署跡地（2区）、東庁舎駐車場跡地（3区）、鉄塔跡地（4区）において、埋蔵文化財確認調査を実施した。県庁跡地周辺は、江戸時代初期から加賀藩の施設があり、江戸時代前期頃からは「堂形」と呼ばれる米蔵を中心とした蔵屋敷地となっていた。

調査の結果、1区・4区では、堂形蔵屋敷段階の辰巳用水（木樋と石管の2条）を検出し、1区ではそれらに平行して土塀基礎と考えられる石列も検出した。他には江戸前期の整地層から焼土とともに炭化米が出土し、寛永の大火（1631）年における堂形米蔵の焼失を裏付けることになった。2・3区では、堂形蔵屋敷の南縁外周水路を確認した。規模は幅約2m、深さは

は現地表面から約1.3mを測る。当初は胴木を伴う護岸石垣を備えていたが、明治初期の埋め戻し時にその大半が取り除かれている。3区ではまた、堂形造成土で埋められた土塁や堀の一部を検出した。土塁の規模は幅3.2～4.5m、高さは堀底から約1.6mであり、当時の地表面からは約60cmの盛土がなされていた。調査区内でほぼ直角に曲がるように構築されており、建物域等の区画施設であると考えられる。構築時期や内部施設は不明であるが、堂形周辺の大規模な造成が慶長から元和年間頃と判明しており、それが年代的な下限と思われる。3区の現地表面下約1.6mで確認された奈良～平安時代の包含層や土坑からは、布目瓦や須恵器が出土している。県庁跡地での古代遺跡の発見は今回が初めてとなり、広坂遺跡の続きが県庁跡地に展開すると想定される。

（伊藤さやか）



遺構概略図 (S = 1/400)



1区 辰巳用水 (石管・木樋) と石列



3区 堂形南縁外周水路



4区 石管 屈曲部分

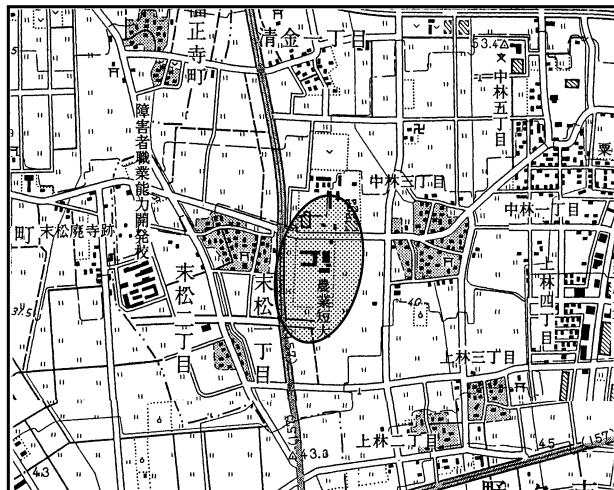


3区 外周水路の石垣と桐木

すえ まつ 末松遺跡

所在地 石川県野々市町末松1丁目地内
調査面積 10,450㎡

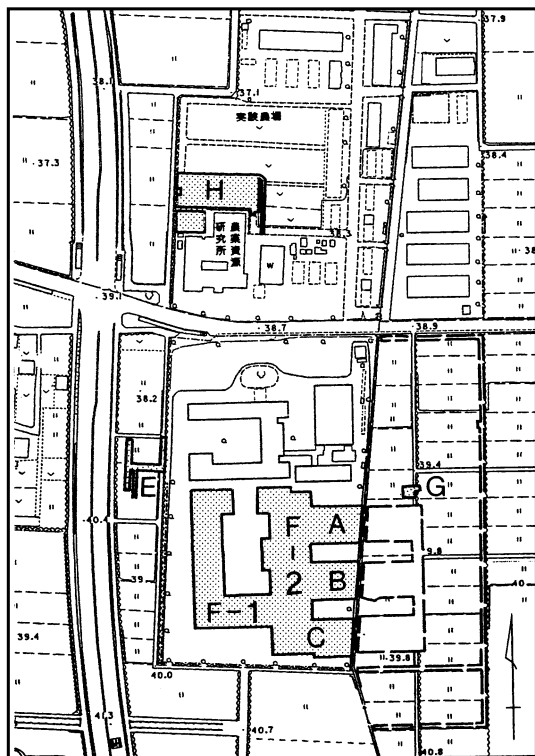
調査期間 平成15年4月28日～同年12月3日
調査担当 金山哲哉 山田由布子 鈴木真之



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果の要点

- ・奈良、平安時代（8～10世紀）の集落跡を確認。
- ・竪穴建物跡、掘立柱建物跡、道跡、畝溝（畠跡）、ピット、溝、土坑、近世河道等を検出。
- ・遺構はE区とH区の安定した微高地上（標高約36～37m）に見られる。
- ・道跡は昭和62年度調査の続きを検出。
- ・畠跡は畝溝の形態により、2～3時期にわけて作り変えが行われたものと推定。
- ・遺物は縄文土器、須恵器、土師器、陶磁器、鉄製品、石器等が出土。



調査区位置図 (S = 1/5,000)

末松遺跡は金沢市の中心部から南西に約8km、野々市町末松地内に位置し、手取川扇状地の扇中部に立地する。石川県立大学(仮称)整備工事に伴い、平成14年度から2ヵ年にわたって県立農業短期大学敷地の発掘調査を行った。今年度の調査は県道額谷・三浦線を挟んで南北に分かれ、農業短期大学グラウンド部分(校舎建設箇所)のA～C、E、F-1、F-2、G区と、農業資源研究所横のH区にわけて行った。奈良、平安時代の集落跡であり、遺跡を代表するような主な遺構・遺物はE区とH区に集中して見られる。

E区では竪穴建物1棟を調査区外にまたがって半分程度検出した。建物内からは火を受けて赤色化したピットを数基検出したが、炉跡であるとの確定には至らなかった。また、カマドの跡も検出できなかった。建物の規模は4m程度になるものと思われる。

8世紀代の土器が出土していることより、この時期

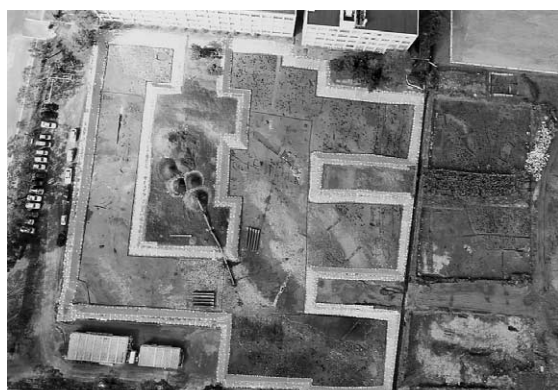
の建物である可能性が高い。その他、2列に並んだ直径30cm前後のピットを確認したが、幅2～4mのトレンチ状の調査区であるため、建物であるかどうかは不明である。

H区では東側の微高地に遺構が集中し、8～9世紀頃の畝溝（畠跡）、道跡、10世紀頃の掘立柱建物1棟等を検出した。畝溝は調査区をほぼ南北に向かって走り、6～8条の溝を一群としている。その方向や切り合いから、2～3時期にかけて畠の作り変えが行われていたものと推定される。道跡は、

昭和62年度に石川県立埋蔵文化財センターが行った調査で確認された道の続きで、当該E域では、側溝と路面の一部を検出した。側溝は幅約1.0m、深さ約0.5mを測る。昭和62年度との調査成果を考え合わせると、道の南北に畠跡が存在し、計画的に生産域を造成していたことが伺える。また、畝溝を切るように、1間×4間の掘立柱建物があり、少なくとも、その場所での畠の造成が行われなくなった後に建てられたようである。

A～C、F-1、F-2、G区では、奈良・平安時代の溝、ピットなどを多数検出した。これらの遺構は北側に集中して見られ、南へ行くに従って希薄になるため、調査区の南側は遺跡の縁辺部であると考えられる。この他、F-2～B区にかけて北西から南東方向へ伸びる近世の旧河道を検出した。

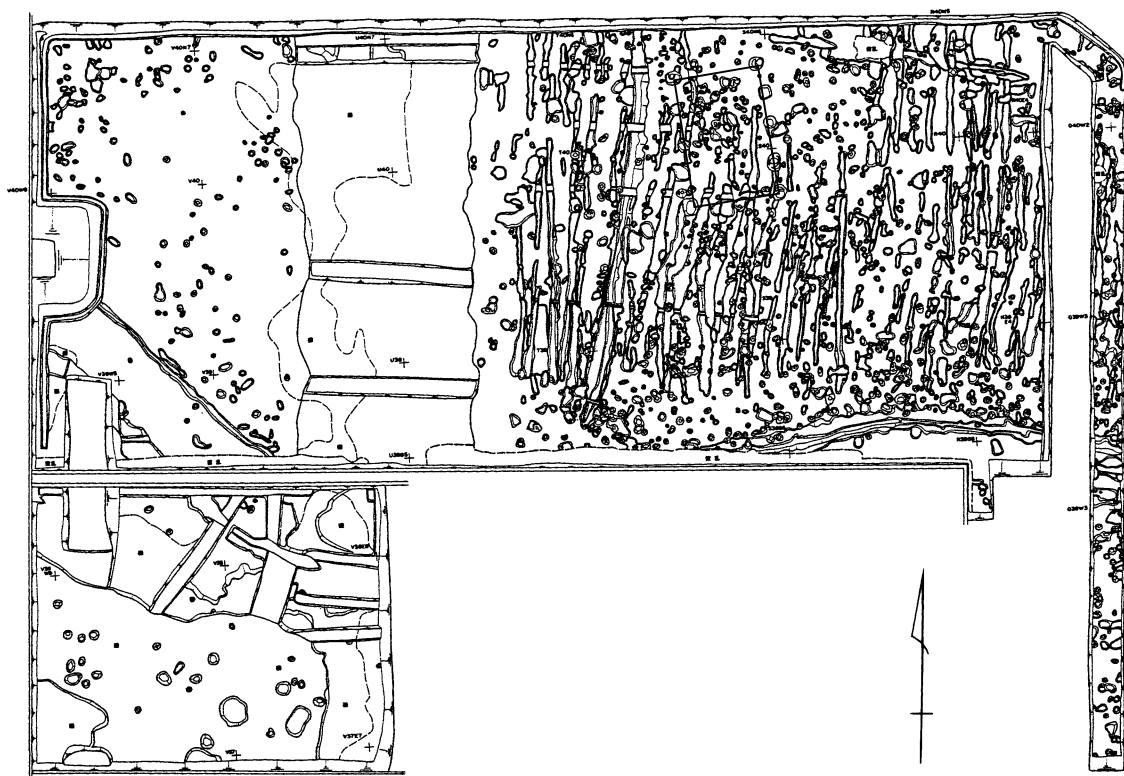
(山田由布子)



A～C・F・G区 完掘状況



H区 掘立柱建物

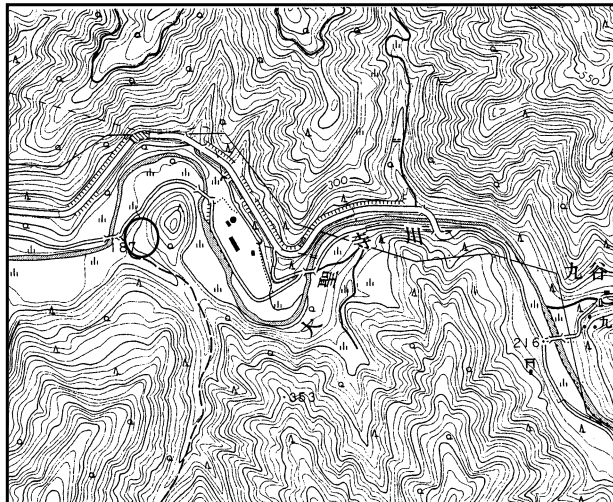


H区 遺構配置図 (S=1/400)

こすぎ 遺跡

所在地 江沼郡山中町小杉町地内
調査面積 530m²

調査期間 平成15年5月1日～同年12月5日
調査担当 西田郁乃 宮川勝次



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果の要点

- ・縄文時代後期後半～末を盛期とした遺構、遺物を検出。
- ・主な遺構として配石、掘立柱建物、捨場を検出した。
- ・各々の遺構ごとにまとまりがみられ、意図的に配置される。

本遺跡は、標高約180mの大聖寺川左岸部に位置する。平成14年度の調査結果で、当初予想されていたよりも遺跡の範囲が広がることが確認され、今年度は、第1次調査となった前年度調査区をコの字に囲むようにして調査区を設定した。

調査区を設定した。

遺跡の時期は、出土土器から縄文時代後期～末頃を中心とするとみられ、多量の遺物からも盛期とみられる。晩期初頭～中頃には少量の遺物が見られ、ごく小規模の活動が続いていたと見られる。

検出された遺構は、配石群と、旧河道によって出来た落込みなどである。調査区東側については、平坦面が広がるため、当初集落域が広がると想定したが、埋設土器が1基確認された他は、遺構は検出されず、遺跡の東端と判断される。これにより本遺跡のほぼ全範囲にわたり調査を行ったこととなる。

配石は、長辺約1m程度に、人頭大から握り拳大の礫を配しており、一部は意図的に打ち欠かれたものや、被熱したものも利用されていた。また配石直下、もしくは一部がかかるような位置に、円筒形もしくは隅丸方形の土坑がみられるものが多くみられる。これらの配石群は、昨年度の調査区とあわせると、遺跡のほぼ中央部で、径約20mの範囲内にほぼおさまるように配置されている。その配石群域の最も北西端の落込み際には、直径約3mの円環状に礫が廻る大型の配石遺構も確認された。この大型の配石遺構とその他の配石遺構の関係や、性格を明らかにすることが今後の課題となる。

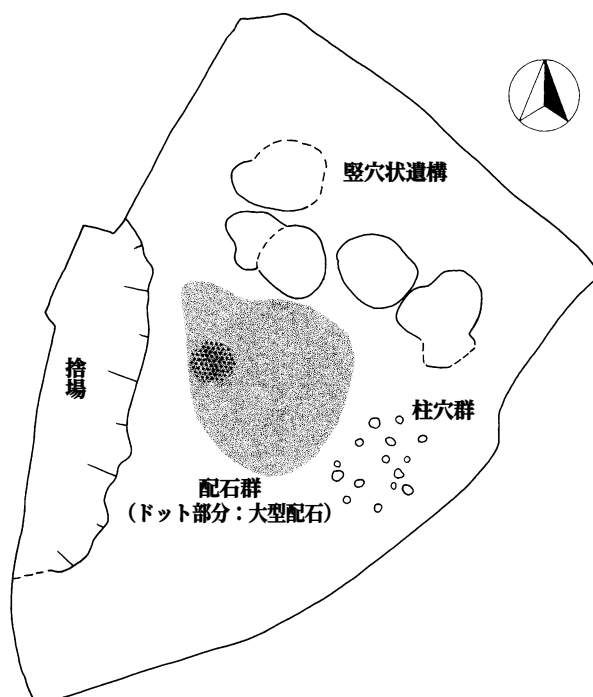
配石群の南側では掘立柱建物跡と見られる柱穴群が検出された。調査区西側に広がる落込みの一角では、多量の土器や石器が出土しており、捨場として利用されていたことが想定される。

昨年検出された遺構を含めると、調査区の中央部から東側にかけて炉状の焼土を伴う竪穴状遺構群、その南側に柱穴群、中央部から西側には配石群と、更にその外縁には落込みを利用した捨場といった配置がみられた。これらは限られた範囲内に一部重なりを持ちながらも、一定のエリアを意識しながら構成されていると考えられる。

(西田郁乃)



遺構図 (S = 1 / 600)



主要遺構配置図 (S = 1 / 600)



西上空より遺跡をのぞむ



作業風景



完掘状況 (南から)

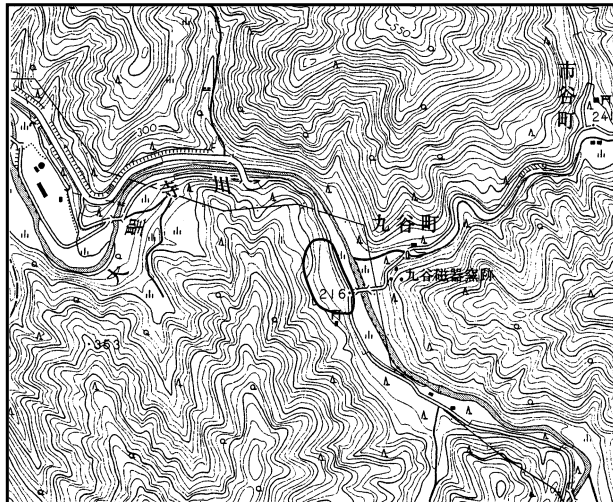
くたに 九谷A遺跡

所在地 江沼郡山中町九谷町地内

調査面積 1,600㎡

調査期間 平成15年8月1日～同年12月5日

調査担当 西田郁乃 宮川勝次



遺跡位置図 (S = 1/25,000)

調査成果の要点

- ・大聖寺川左岸部と右岸部、杉ノ水川左岸部の3地点を調査。
- ・大聖寺川左岸部の調査区では戦国時代から江戸時代にかけての集落跡を検出。
- ・右岸部と杉ノ水川左岸部では江戸時代以降の土地利用が判明。

本調査は九谷ダム建設に伴う発掘調査である。第10次を数える今年度調査は、大聖寺川の兩岸と、杉ノ水川の左岸部の3地点について調査を行った。

大聖寺川左岸調査区は、戦国時代から昭和

期にかけ連綿と続く九谷集落の一部を確認した。遺構では、南北方向に延びる道路遺構とみられる石敷きや石列、宅地跡などが検出されている。石列は道路と宅地部分を区画し、道路にむかって石列の面は揃えられている。道路遺構は、戦国時代の遺構を切って作られており、江戸時代に整備されたと思われる。調査前まであった、舗装道路もほぼ同じルートを利用しており、およそその道筋は、近代以降も踏襲されたと思われる。この道路遺構の両側は宅地が広がっていたと見られ、多数の井戸や便所と見られる埋桶群、柱穴群が検出された。井戸や便所などは、調査区の数地点で比較的集中して造られており、それらの配置から、宅地割りが推定される。井戸は全て石積みで、最下部には石積みの沈下を防ぐ目的で、木材が井桁状または多角形に組まれる。井戸の平面形では、円形、多角形、略方形になるものがみられ、直径は0.6～1mを測る。出土遺物は少ないが、特筆するものに、SE2とした、小ぶりの碟を比較的丁寧に積んだ井戸の底面から出土した多数の陶磁器があげられる。これらの陶磁器の多くが対岸にある九谷第1号窯の製品と思われ、降灰や、焼け歪みが著しいものが含まれる。一部は対岸の物原から失敗品を採集してきたとみられるが、その目的は不明である。

調査区北西部では、道路遺構により一部が削平された小穴から明染付碗と鏡（花菱唐草双鶴鏡）が出土した。鏡は鏡面を上にし、染付碗が鏡を覆うように置かれ、傍から北宋銭（政和通寶）も出土した。埋土は、炭化物を多量に含むもので、同時期とみられる他の遺構にも焼土粒や炭化物粒が多く含まれることから、戦国時代末頃に集落内で火災があったことが推測され、火災後に地鎮を目的として埋納された可能性がある。

大聖寺川右岸調査区は、江戸時代以降に造成され、耕作地として利用されていた状況を確認した。

杉ノ水川左岸調査区では、江戸後期以降に構築された護岸の石積み基底部と、耕作地として造成された平坦面を検出した。

(西田郁乃)



遺構図 (S = 1/400)



調査区全景 (東からのぞむ)



鏡出土状況
(鏡面を上にし、染付碗が鏡を覆うように置かれる)



花菱唐草双鶴鏡

平成15（2003）年度下半期の遺物整理作業

企画部整理課

1 班

平成14年度調査の整理となる八野B遺跡（高松町）、太田ニシカワダ・ツツミダ遺跡（羽咋市）に引き続き、額谷遺跡（金沢市・平成12年度調査）、矢田野遺跡（小松市・平成14年度調査）の整理作業を行った。額谷遺跡は、土師器皿をはじめとして蔵骨器と思われる珠洲焼片や瀬戸・美濃陶器の瓶子のほか、宝塔、五輪塔などが出土しており、埋葬施設として利用されていたと思われる。また、故意にくだいたかどうかは不明だが、出土した宝塔のほとんどは原形をとどめておらず、接合に多くの時間を費やす大変根気のいる作業となった。

矢田野遺跡では、甕、壺、坏、高坏、フイゴの羽口など様々な遺物が出土していた。中には、遺存状態のよい完形の提瓶や珍しい円筒埴輪の破片もみられた。下半期の整理作業では、私自身が今までに担当したことのない遺物にふれることが多く、学びながらの作業となった。（芝山美知代）

2 班

千代・能美遺跡（小松市・平成12・13年度調査）の整理作業を行った。この遺跡は、有力者の居住空間周辺に“祭祀”・“生産”という各種機能を担う区画が付随し、川跡・柵列・大溝などによって明瞭に区分された古墳時代前期の首長居館である。収納箱107箱の分類・接合、実測・トレース作業を行ったが、難易度の高い遺物の実測点数が多く大変であった。

遺物としては、布留甕、小型土器（壺・甕）、ミニチュア土器をはじめ、高坏・器台に関しては、三方または四方に2個1組の透かし穴をもつものも多くみられた。木製品では、直径約55cmの大形高坏受部や台付容器、木針数十点、クサビなどがあった。土器の実測では、調整痕の書き方に戸惑うこともあったが、苦勞した分とても勉強になる遺跡であった。（宮本已恵）

3 班

上半期から行っていた金沢城跡北ノ丸1次他（金沢市・平成9～12年度調査）の実測・トレース作業を引き続き実施した後、冬野遺跡・免田一本松遺跡（押水町・平成14年度調査）、小杉遺跡（山中町・平成14年度調査）、そして最後に金沢城跡三ノ丸1・3次他（平成9～12年度調査）の整理作業を実施した。

印象深いのは、金沢城跡の石瓦の実測である。丸瓦・平瓦・軒瓦・棧瓦・棟瓦のほかに、鬼瓦と鳥衾のセット、さらに石段に転用された棟瓦など様々な種類の瓦が出土しており、それらが城の屋根瓦として機能していたであろう姿を想像し



金沢城跡の石製鬼瓦実測

ながらの作業であった。一枚一枚の瓦の大きさと重さのため実測作業は難航したが、ツルやチョウナの加工痕や各々の特徴を間近で観察できたことは、非常に貴重な体験だったと思う。

(海野美香子)

4 班

鳳至町畠田遺跡(輪島市・平成14年度調査)では、8世紀後半～9世紀初頭にかけての井戸の部材、須恵器の蓋、坏、甕、壺、土師器の椀などがあつた。大坂古屋垣内遺跡(志賀町・平成14年度調査)は調査区が狭いためか遺物の種類は多いが破片数が足りず、形になるものが少なく残念だった。特筆するものとしては、土製の鏡の模造品があげられる。南方遺跡(珠洲市・平成13年度調査)では、古代～中世の遺物が出土しているが、調査面積は小規模であつた。館開野開遺跡(志賀町・平成13年度調査)は、14～15世紀代の遺物が中心で、完形に近い珠洲焼のすり鉢や大量の鉄滓があつた。

以上、4件の遺跡の整理作業を行った。いずれも整理箱数は多くはないが、目まぐるしく過ぎた下半期であつた。

(下村 薫)



館開野開遺跡の大型木柱実測

5 班

下半期前半は、上半期に引き続き、大町ゴンジョガリ遺跡(羽咋市・平成12年度調査)の整理を行った。木器、石器、金属器の実測・トレース作業を行った。曲物の保存状態が悪く、改めて大型木製品、特に発掘してから整理にとりかかるまでの保存に関して改善の必要性を痛感した。他に木器では木筒、漆器椀、農具、糸巻具等、石器では磨製石斧、石鏃、スクレイパー、砥石、金属器では銅銭と、土器以外をみても多種多様の遺物が出土している。

次に、真脇製塩遺跡(能都町・平成9～10年度調査)を整理した。製塩土器は個体の判別が難しく、時間内に十分な接合をすることが困難であつた。製塩土器の分類・接合方法を再検討する必要性を感じている。最後は杉野屋専光寺遺跡(志雄町・平成13年度調査)の整理を手がけた。弥生～平安時代の複合遺跡であるが、寺院関連遺物が多く、瓦や墨書土器に交じって希少な木製品も出土している。

(横山そのみ)



杉野屋専光寺遺跡の鉄滓実測



畠田・寺中遺跡の土器補強

6 班

畝田ナベタ遺跡（金沢市・平成14年度調査）の出土品整理作業を行った。木製品の実測・トレース作業は上半期で終了、下半期は記名・分類・接合及び土器、石製品、金属製品（銅銭）の実測・トレース作業を行った。この遺跡は平安時代を中心とし、遺物には墨書土器、須恵器、土師器、施釉陶器、土製品（土錘、支脚など）の他に、フイゴの羽口、鋳型、鉄滓など鑄造関係の遺物や少量の瓦もみられた。石製品では石鏃、打製石斧、磨製石斧、石錘、凹石、管玉、石包丁、砥石、石帯、炉壁、炉石、大型の焼石など幅広く、これらの多種多様な遺物に触れることでこの遺跡の特徴を学ぶことができた。



畝田ナベタ遺跡の井戸粹水づけ

続いて畝田・寺中遺跡（金沢市・平成15年度調査）の記名・分類・接合及び土器、石製品、木製品の実測・トレース作業を行った。木製品では指物容器部材、弓、農具、礎板などがあり、中でも興味深いのは違う柱穴から出土した礎板同士が接合したことである。今後、木製品の接合関係にも注意し確認してみる必要があると感じ、とても貴重な経験をしたように思う。

（中條倫子）

7 班

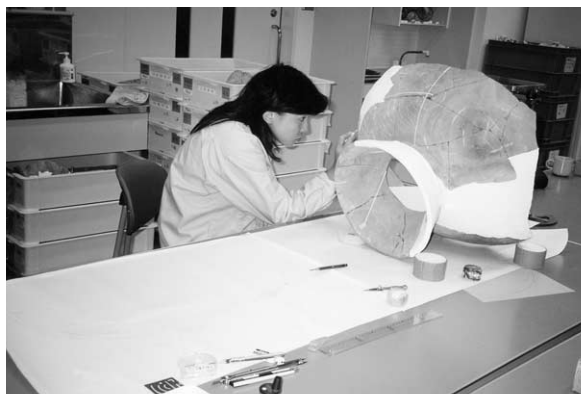
上半期から続けていた畝田・寺中遺跡（平成13年度調査）の実測・トレース作業を完了し、次に同遺跡の平成15年度調査の整理作業にはいった。出土品は弥生時代中期～古墳時代にかけての甕、壺、高坏の他、須恵器では透かし穴のあいた高坏や甕などもあった。実測するにあたり、中型の甕は内外面ともに拓本を採らずに図化を試みた。板で叩かれ形成されたことを意識し、1つ1つの面を確認しながらの作業であった。

また、数は少なかったが墨書土器もあり、中には一部しか残っていなかったものの白抜きで「上」と書かれたものもあった。白抜きで書かれたものは初めてだったので、是非完全に残っているものを見てみたいと思った。他にも種もみ壺とみられる大型の壺、近世の酒瓶や七厘など様々な遺物に触れることができた。

（北 寿栄）



畝田・寺中遺跡の大型土器実測①



畝田・寺中遺跡の大型土器実測②

8 班

上半期に引き続き、畝田・寺中遺跡（平成13・14年度調査）と三室オンド遺跡、三室堂ヶ谷内遺跡（七尾市・平成14年度調査）、畝田 D 遺跡（金沢市・平成15年度調査）の整理作業を行った。三室オンド遺跡他では、風鐸の先にある風招という木製品も出土した。畝田・寺中遺跡では、暗文のある内黒椀、土師器の匙等が出土し、手づくね製品も比較的多くみられた。

この遺跡で大変だったのは罌の波状文で、トレース時に1/2になったので線がつぶれてしまわないように注意が必要だった。

（中村静絵）

洗浄班

下半期は、職員2名とパート7名で13遺跡の洗浄を並行して行った。遺跡にもよるが、須恵器の坏類には墨書が書いてあるものも多く、底部は特に注意して洗った。

また、今回小島西遺跡（七尾市・平成14年度調査）の洗浄を行っていた時、よごれなのか絵なのか判断に迷うものがあった。担当者にみてもらった結果、人面墨書土器であることが判明し、珍しいものだということであった。その後も注意深く洗っていると、何片か破片を見つけることができた。前の段階で見落としがあるのではないかと心配である。次の分類・接合時に多くの破片がみつかり、少しでも完形品に近づいてくれればと期待している。

（中村真弓）

復元班

下半期の復元作業は、額谷遺跡、矢田野遺跡、千代・能美遺跡、金沢城跡、大坂古屋垣内遺跡、杉野屋専光寺遺跡、畝田・寺中遺跡などがあった。各遺跡から選別されて復元にまわってくる遺物の中には、大型の甕や壺から土師器皿のように小さなものまで様々である。

また、口縁部～底部までであるものや口縁部～胴部までとか、胴部～底部までとか色々な残り方で出てくるものもある。残り破片が少なくても、実測図をみながら石膏を補っていくとそれなりに形になっていくものである。今年度は例年になく復元点数が多くあったので大変であった。

（前田すみ子）



畝田・寺中遺跡の七厘復元



畝田・寺中遺跡の七厘実測

1 はじめに

赤浦大割遺跡は七尾市赤浦町地内に所在し、赤浦瀧の南東に開析された谷の一支谷で、低地に面する東向きの丘陵裾部に立地する。発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが行っており、小文ではその遺構・遺物を紹介したい。調査の原因、期間、面積、担当者などは下記のとおりである。記録資料と出土遺物については石川県埋蔵文化財センターで保管されている。

調査原因 県営ほ場整備事業（西湊工区） 調査期間 平成8（1996）年4月19日～4月26日
調査面積 40㎡ 担当者 本田秀生、安 英樹、松山温代、河村美紀 補助員 大藤雅男

2 調査区

調査区は排水路及びパイプライン工事によって遺跡が破壊される部分に相当し、谷口を南北方向に貫く細長いトレンチである。記録の基準はN-2°-Wを指す水路の中心軸線であり、調査区北方のT字状交点から南へ13mの地点を起点（0m）とし、起点から南へ向かって任意座標を設定した。

層序は上位から現農道盛土、盛土、遺物包含層、地山と推移する。遺物包含層は砂質土基調で、層位の上下や土質により上位から①～③に三分できる。①は遺跡の最終埋没土であり、盛土や部分的に見られる旧耕作土（第4図東壁層3・4）の直下に位置する。②は遺構の埋土や生活面と一体化した土壌であり、遺構や地山を直接被覆する。③は低地への堆積土であり、地形が下降する地点にのみ見られる。調査区東・西・南壁土層の対応関係は下記のとおりである。

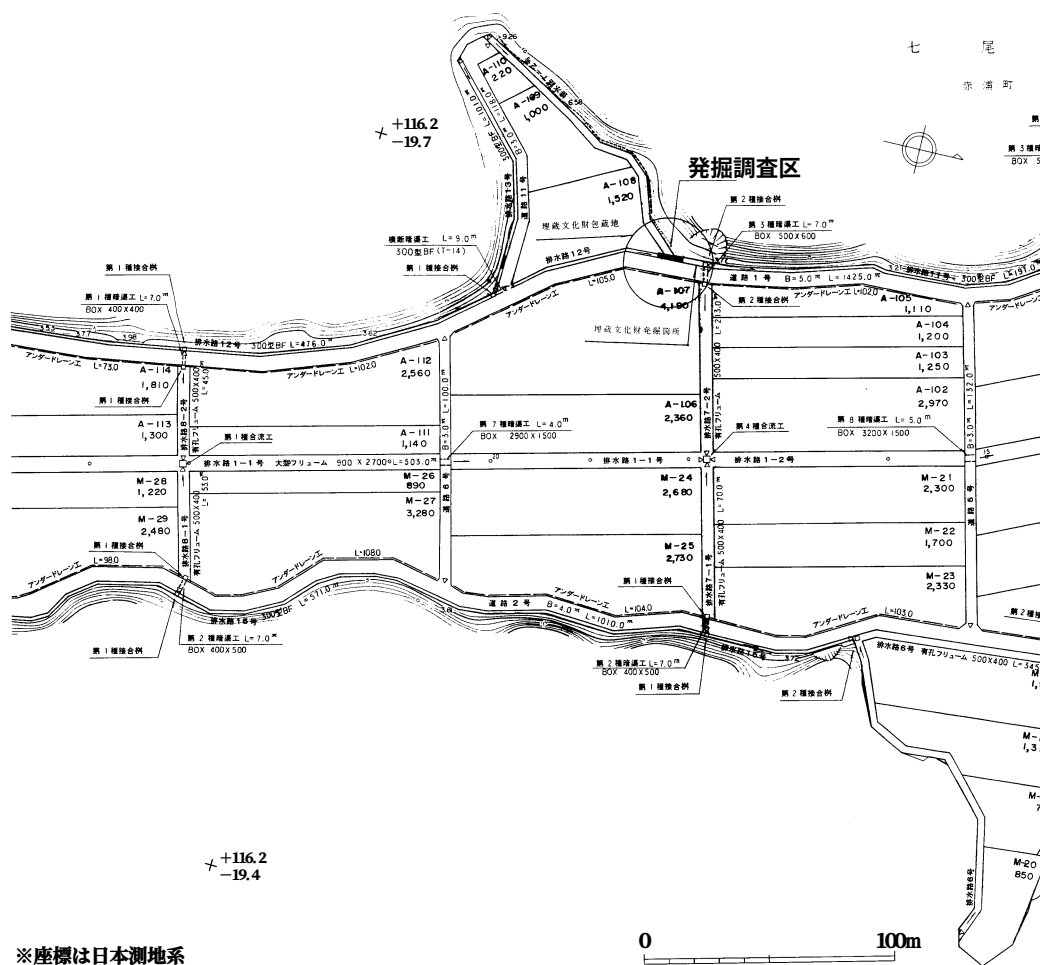
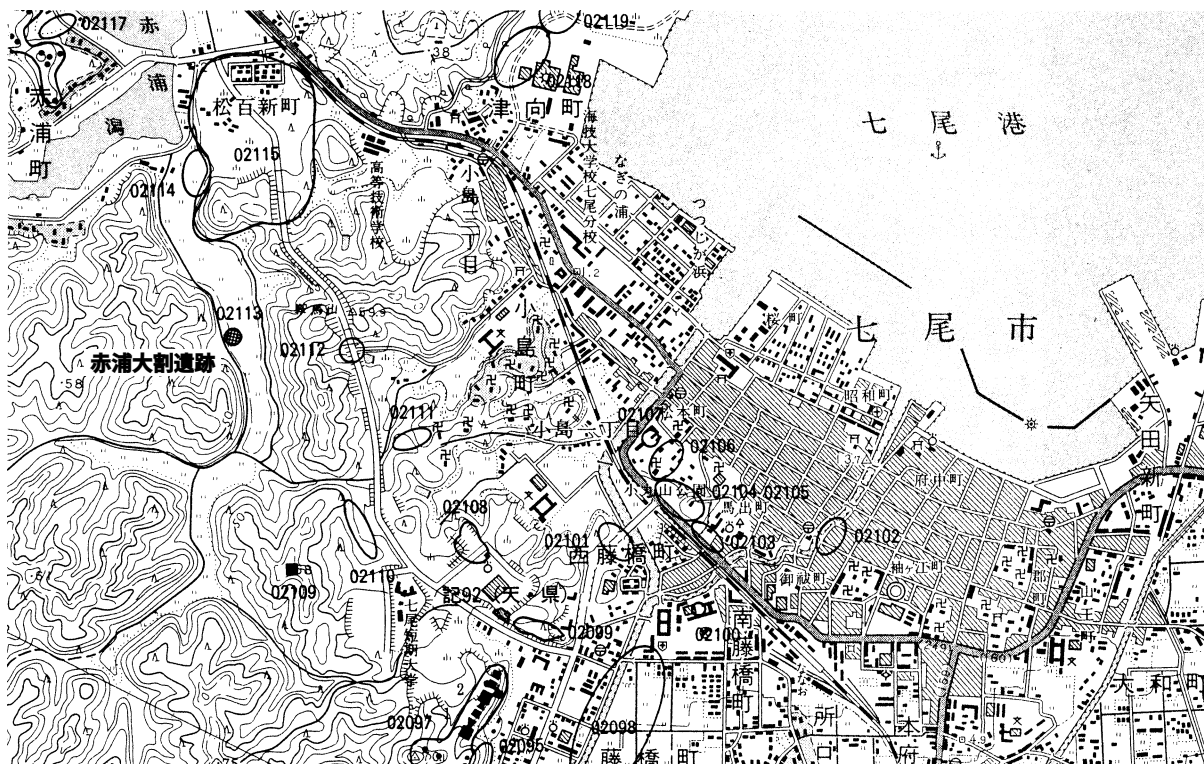
遺物包含層①	第4図東壁層5・6	第3図西壁層5・6	第3図南壁層4
遺物包含層②	第4図東壁層8・9・13・29	第3図西壁層7・9・10	第3図南壁層7
遺物包含層③	第4図東壁30・31	第3図西壁層11・12	第3図南壁層8・9

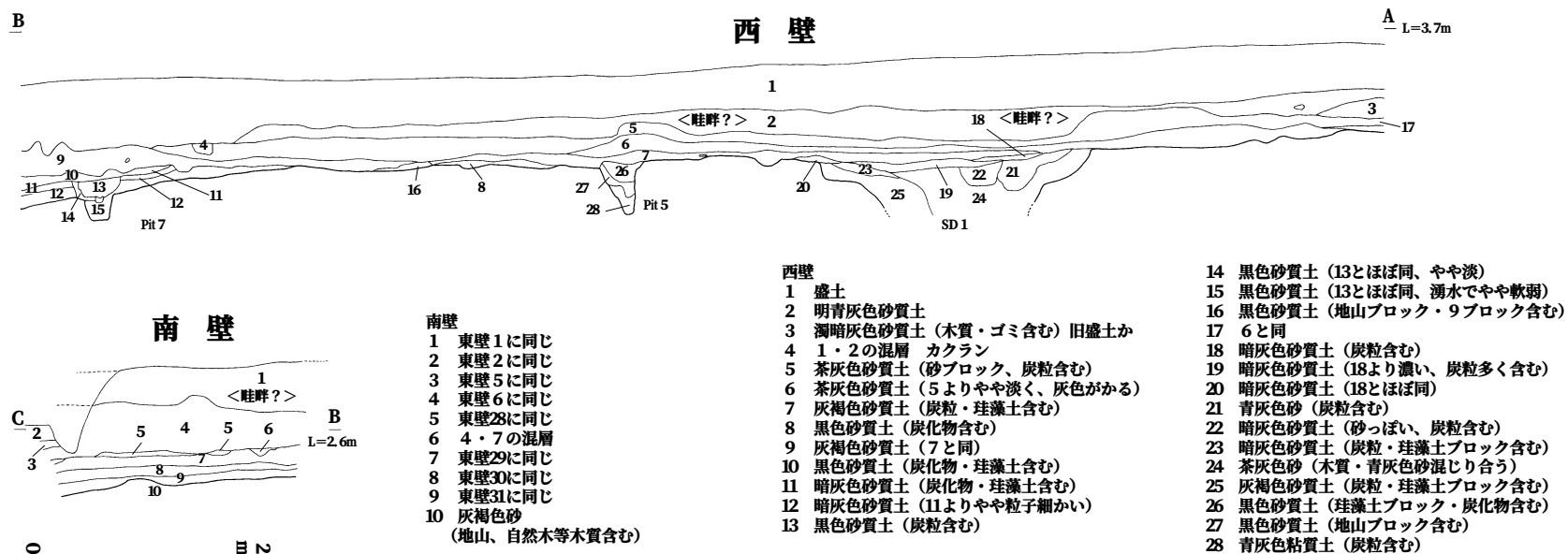
地山は灰色～青灰色の砂である。地山面の標高は北西端で2.8m、北端で2.6m、起点から11m地点では2.3m、南端で2.1mと落ち込んでいく。地形的には丘陵側の西が高く、赤浦瀧へ向かう北が低くなるはずであるが、南には小支谷の谷央が存在しており、それを反映した落ち込みであろう。また、北西端は丘陵裾が伸びていたものが削平されており、段状となる。

3 遺構

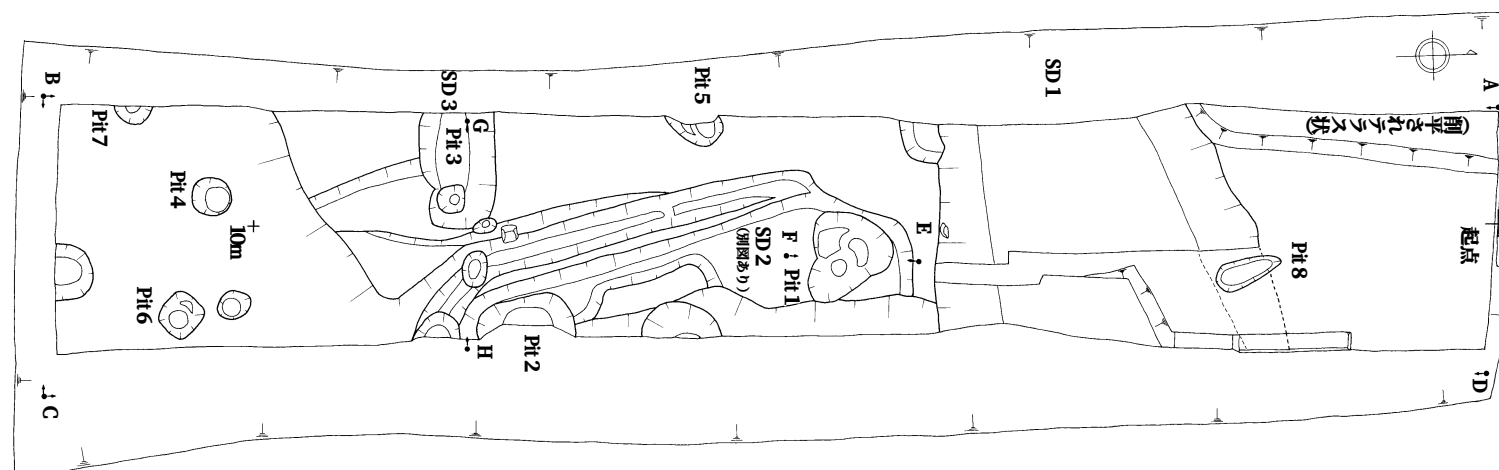
遺構は溝（SD）3条、穴（Pit）8基を検出した。北側のSD1と南側のSD3に挟まれた部分に遺構が集中しており、以北は希薄になり、以南は穴群のみとなる。

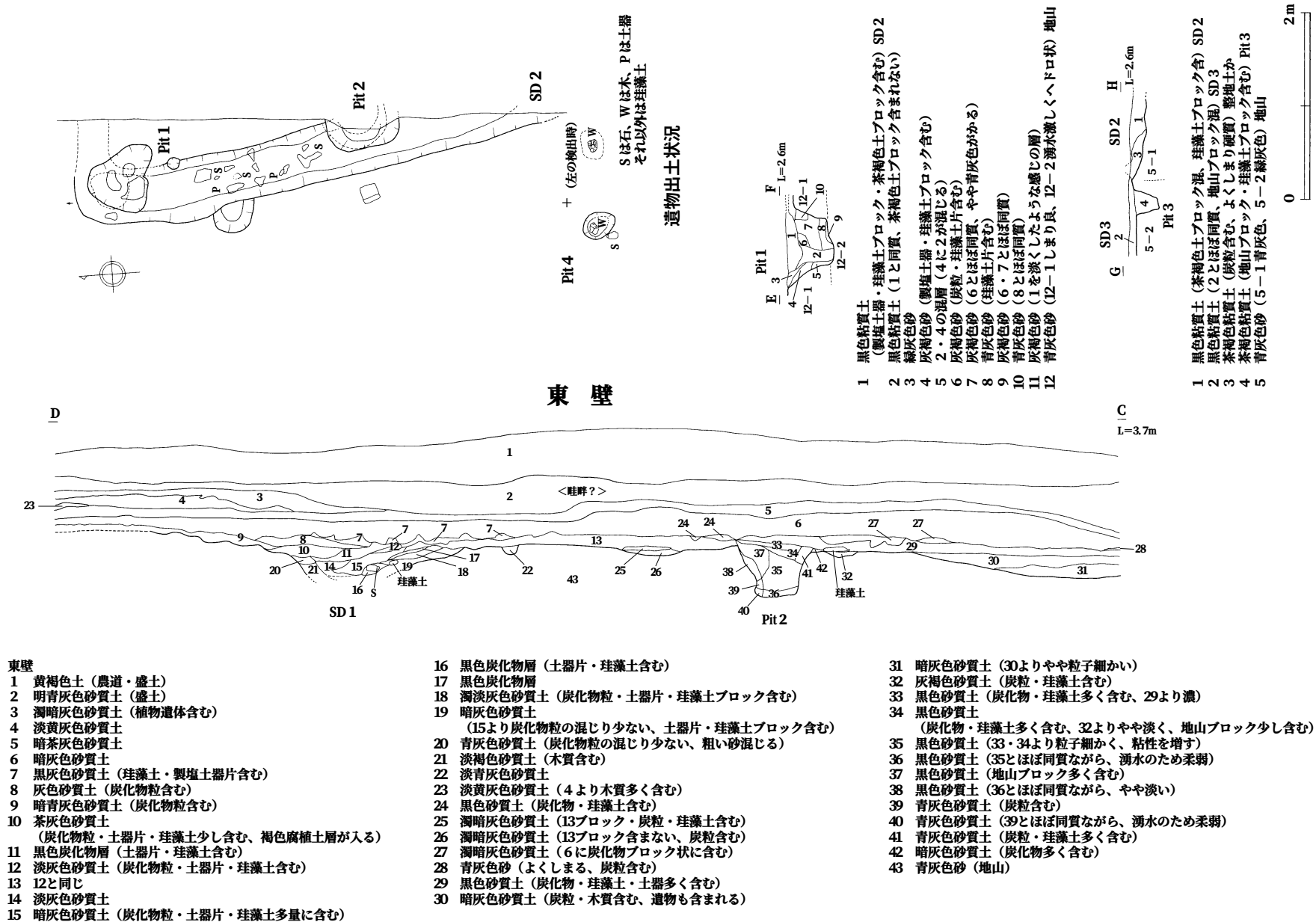
溝 SD1は遺物包含層②の下位で検出された。幅2.2～2.6mで、東西方向に走る。深さは50cm以上に達するが、崩れやすいため底まで掘り下げられなかった。堆積は、東壁側は有機質土が積層しているが、西壁側は砂中心であり、地点により異なる（第3図・第4図）。埋土の上面でPit8が検出さ





第3図 遺構実測図1 (S=1/60)





第4図 遺構実測図2 (S=1/60)

れ、その延長（第4図東壁層13）を切り込んで Pit 2 が掘り込まれている。SD 2 は遺物包含層②と一体的な埋土で検出され、重なっている Pit 1・Pit 2 よりも後出する（第4図）。南北方向に走り、北側はほぼ直角に東へ折れ曲がる。幅54～64cm、深さ6～12cmを測る。北側ほど浅くなり、底面の標高も高くなっており、北端ではほぼ痕跡を残すのみである。SD 3 は SD 2 と同じ層準で検出され、重なっている Pit 3 よりも後出する（第4図）。幅は最大で60cm、深さ7cmを測る。

穴 不整形な Pit 8 を除けば、整った形状から柱穴の可能性が高いが、調査区の制約により建物は復元できない。全て遺物包含層②の下位で検出されているが、Pit 2 は SD 1 埋土の延長を切り込んでおり、Pit 5 と Pit 7 は SD 1 と同じ層準で検出されている（第3図・第4図）。Pit 4 と Pit 6 は後者と同様な検出状況である。Pit 1 と Pit 2 は径70～80cm、深さ50～60cmと規模が大きく、整った断面形など共通する点が多く、間隔は2.5m とやや広いが、同じ掘立柱建物跡の柱穴となる可能性が高い。この他の穴は Pit 8 を除けば径30～50cm、深さ24～50cmとやや規模が小さい。ただし、Pit 5 と Pit 7 は調査区外へ伸びているので確定したものではない。Pit 4 とその東側の穴には木柱根が残っていた。

その他 面としては調査していないが、東・南壁面で1箇所、西壁面で2箇所ずつ、遺物包含層①上面の盛り上がりを確認でき、帯状の隆起が復元されることから、水田の畦畔が存在した可能性がある。高さは10cm前後、幅は東壁側が上端で1m、西壁側は40cmと90cm、南壁側は20cmである。上下層（東壁・西壁とも層5・層6）で見られることから新古2時期が想定される。

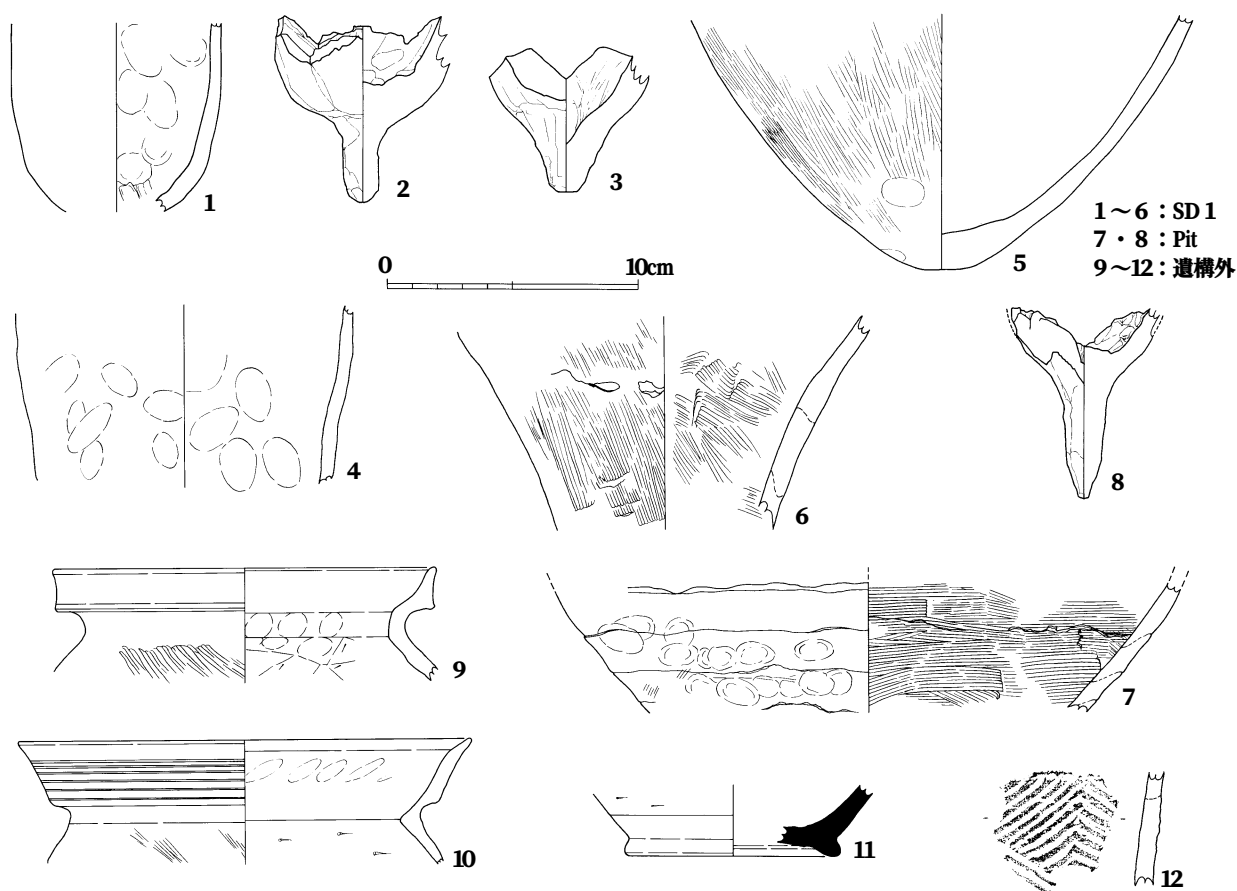
4 遺物

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、珪藻土塊等が出土しており、パンケースⅡ型に2箱の量がある。遺物の大半は製塩土器・珪藻土塊であり、調査区の全域と大半の遺構から出土している。遺存の良い遺物を選び、12点を図化した（第5図）。

溝 SD 1 からは弥生土器、製塩土器、珪藻土塊、木製品、モモ種子が出土している。1～3はSD 1 上層出土で、すべて製塩土器である。1は下位が紡錘状となる器形から棒状脚が想定される。2は緩やかに面をもつ底部に短い棒状脚が付く器形で、棒状脚は先端のみ橙色を発する。内面には粘土を貼り付けた痕跡があり、棒状脚を接合した可能性がある。3は底部に面を持たずに棒状脚が付く漏斗状の器形である。4はSD 1 下層出土の製塩土器で、薄手筒形の器形である。5・6はSD 1 出土であるが層位不明である。5は弥生土器であり、やや大型の安定した平底甕である。内外面とも炭化物が付着するが、外面はスス、内面はコゲであり、外面下半は被熱により剥離・摩耗している。6は大きく広がっていく器形の製塩土器であり、7と同一個体の可能性がある。SD 2 からは製塩土器と焼けた珪藻土塊・レキが集中して出土している。SD 3 からは製塩土器が出土している。

穴 Pit 1 からは土師器、製塩土器、珪藻土塊が出土している。7はPit 1 出土の製塩土器で、大きく広がっていく器形である。6とは遺構が異なるが、胎土や色調、質感が共通し、ともに同一個体らしい破片が多く出土しており、棒状脚の底部を含む。同一個体とすれば6が下位、7が上位でかなり括れの強い器形となろう。Pit 2 からは製塩土器、珪藻土塊が出土している。Pit 3 からは製塩土器、土師器が出土している。Pit 4 からは製塩土器、弥生土器が出土している。Pit 6 からは製塩土器が出土している。8はPit 6 出土の製塩土器で、細長い棒状脚が付く。内面には粘土を貼り付けた痕跡があり、棒状脚を接合した可能性がある。Pit 8 からは弥生土器、製塩土器が出土している。

その他 9・10は弥生土器で、調査区南端の遺物包含層③から出土した。9は有段口縁無文甕で、口径15cmに復元される。口縁帯は短く丸縁、頸部は筒状で、胴部は厚い。10は有段口縁有文甕で口径



第5図 遺物実測図 (S = 1 / 3)

遺物観察表

番号	仮番	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	色調	胎土
1	11	製塩土器	棒状脚・胴	摩耗	指頭押圧、摩耗	淡橙褐	径0.5~4mm石英・長石多、赤色粒、海綿骨片
2	7	製塩土器	棒状脚・底	指頭押圧、ナデ	指頭押圧	黄褐	径0.5~2mm石英・長石多、赤色粒
3	11	製塩土器	棒状脚・底	ナデ	シボリ	黄橙褐	径0.5~2mm石英・長石多、赤色粒
4	14	製塩土器	棒状脚?・胴	指頭押圧	指頭押圧	にぶい橙	径3mm以下石英・長石多、赤色粒、海綿骨片、雲母
5	9	弥生土器	甕・底部	ハケ	ケズリ?	暗橙褐	径0.5~5mm石英・長石多
6	2a	製塩土器	棒状脚?・胴	ハケ	ハケ	灰黄	径4mm以下石英・長石多、海綿骨片、雲母
7	2b	製塩土器	棒状脚?・胴	指頭押圧	ハケ	灰黄	径2mm以下石英・長石多、海綿骨片、雲母
8	1	製塩土器	棒状脚・底	ハケ	指頭押圧	黄褐	径0.5~2mm石英・長石多、海綿骨片
9	3	弥生土器	甕・口縁	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、指頭押圧、ケズリ	にぶい黄橙	径0.5~5mm石英・長石多、海綿骨片、雲母?
10	4	弥生土器	甕・口縁	ヨコナデ、擬凹線、ハケ	ヨコナデ、指頭押圧、ケズリ	浅黄橙	径4mm以下石英・長石多、海綿骨片、雲母
11	10	須恵器	瓶・底部	ロクロナデ、ケズリ?	ロクロナデ	灰	径0.5mm以下石英・長石少
12	5	縄文土器	深鉢・胴	文様(半隆起線)	ナデ	灰黄褐	径1mm以下石英・長石多

18cmに復元される。口縁帯は長く尖縁、内面はくの字状に屈曲し、胴部は薄い。9は谷内・杉谷編年の7期、10は同8～9期の時期である¹。同地点・同層では製塩土器や珪藻土塊と混在して弥生土器が比較的多く出土している。11は遺物包含層から出土した須恵器である。底径8cmに復元される小型有台品であるが、ケズリの位置から食膳具ではなく貯蔵具とした。内面に降灰している。遺物包含層からはこの他、珪藻土塊、魴滓、モモ種子が出土している。12は調査区周辺で採集された縄文土器の深鉢である。文様は半隆起線を結節状に配するモチーフであり、縄文前期後葉の福浦上層式に比定できる。

5 まとめ

検出された遺構については、柱穴など居住に伴うものが主であり、前後関係や規模の類似から概ねⅠ期（SD1下層、Pit3～7）→Ⅱ期（Pit1・2、やや時期幅を持つがSD1上層）→Ⅲ期（SD2・3）に変遷を整理できるが、狭小な調査区なため詳細は不明である。出土した遺物は製塩土器と珪藻土塊が主で、製塩土器の形態が棒状脚で占められる²ことから、遺構の時期は古代に限定でき、Pit6出土の8からⅠ期の上限は8世紀代、SD1上層出土の2からⅡ期の下限は9世紀代の年代が与えられる。Ⅲ期は小破片をみる限り、また製塩土器自体の終末を考えるなら、Ⅱ期と大きく隔たらない年代となろう。遺物包含層①・③についても出土遺物から古代の堆積と考えたい。珪藻土塊はほぼすべて被熱しており、付近で産出されたものが炉材として使用されているようである。

以上から、遺構では居住、遺物では製塩の活動が同時期に窺われ、両者の複合したものが赤浦大割遺跡の実態となる可能性が高いことが指摘できよう。類似した遺構・遺物は、周辺の赤浦やまあと遺跡³、能登島町無関カキノウラ遺跡⁴等でも確認できるが、本例は狭小な調査区のため詳細には対比できない。ただし、遺跡自体の小規模さや、小規模な建物遺構の存在、底部棒状脚付き製塩土器の卓越、珪藻土塊の利用などは、七尾湾岸の製塩遺跡でかなり普遍的な存在であることが近年の調査で確認されつつある。赤浦大割遺跡の資料もその一例となるものであろう。

注

1 石川県立埋蔵文化財センター『谷内・杉谷遺跡群』1995年

2 製塩土器の底部を計量した結果、棒状脚は20個体確認しているが、台脚や平底は確認できなかった。

3 財団法人石川県埋蔵文化財センター『七尾市赤浦やまあと遺跡』2001年

4 石川県能登島町教育委員会『無関カキノウラ遺跡』2000年



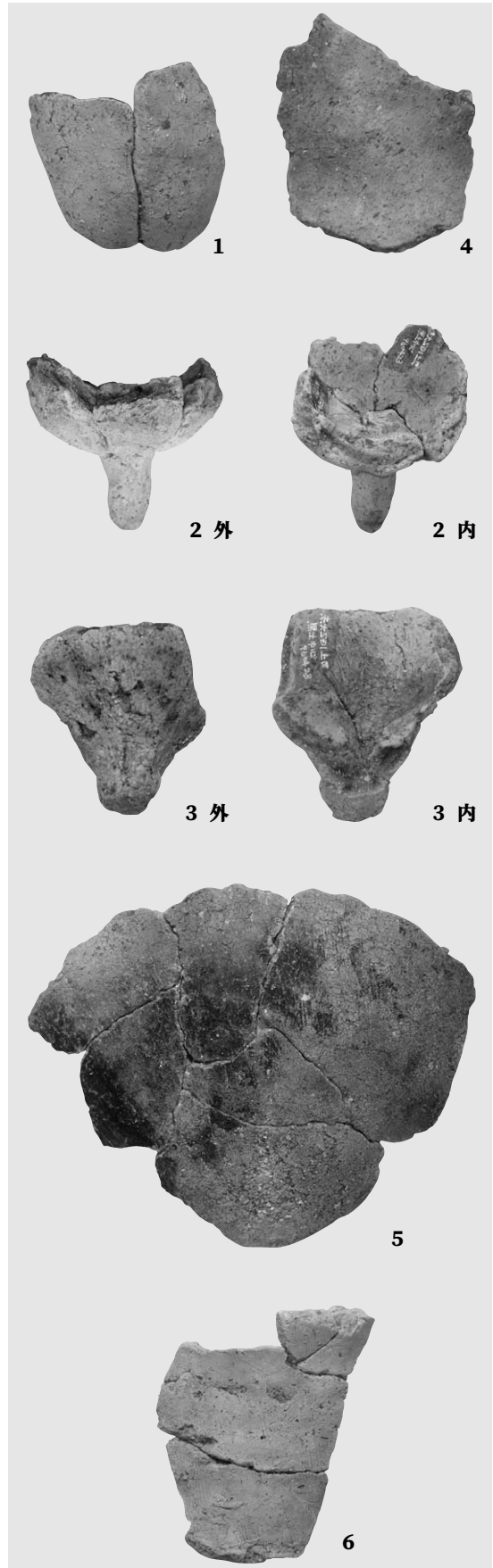
調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



SD1 遺物出土状況（東から）



出土遺物1



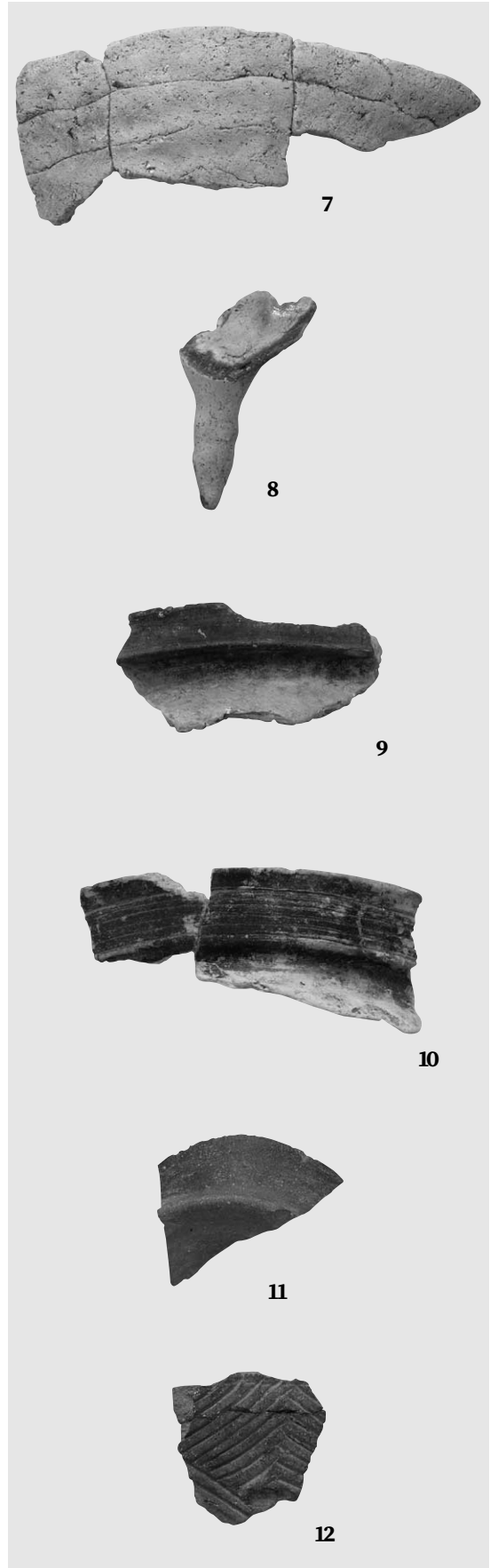
SD 2 遺物出土状況（北西から）



Pit 1 全景（西から）



Pit 2 土層断面（西から）



出土遺物 2

金沢市銚子町採集の瓦について

柿田祐司



採集された軒丸瓦

平成15年11月11日、金沢市銚子町在住の得能武さんが、石川県埋蔵文化財センターに1点の瓦を携えて来られた。写真の軒丸瓦がそれである。得能さんは、その瓦について詳細を調べに来られたとのことであった。

小嶋調査部長と柿田が応対し、採集時の状況等についてお伺いしたところ、大雨が降って増水した自宅付近の、浅野川に流れ込む小川の底から採集されたとのことであった。この瓦が古代の瓦であること、また重要な遺物であることなどを説明し、しばらくお預かりして写真や実測図作成等行

えないかをお聞きしたところ、快諾していただいた。また後日瓦をお返しに上がる際に現地を案内していただくことになった。

写真撮影と実測図作成等を完了した後、11月27日に得能さん宅を調査部長とともに訪ね、現地の案内とお預かりしていた軒丸瓦、そして作成した実測図等の資料をお渡しした。現地は、山からの急斜面を滝のように小川が下り降り、浅野川に注ぐ直前に池のような溜まりを形成した場所であった。その溜まりの中に瓦があったと案内していただいた。

その場所の状況から判断すると、採集場所近辺に窯跡があるとは考えられないところであった。おそらく山側の方から水とともに転がり落ちてきたものであらうと考えられた。事実、金沢市末窯跡群が所在するのは段丘の中ほどまでで、下りきった下段の部分で窯跡は発見されていない。また、浅野川のそばということもあり製品の集積場であり、瓦を運んだ舟着場が近くにあるのではとも考えたが、現状で見る限りそのような場所でもなかった。山側の方に瓦を焼成した窯跡があり、大雨が降ったことで転がり落ちてきたものとするのが自然である。

採集された軒丸瓦

採集された瓦は、軒丸瓦の瓦当面の破片である。上端部が欠損しており、瓦当文様も全て残っていないわけではない。現存している部分からその径を推定すると約15.6cmとなる。表面の色調は全体に黄褐色であるが、割れ口の断面を見ると灰色である。胎土を観察すると、粘土素地は粒子が粗く砂礫等はほとんど含まない。末窯跡群産の須恵器と肉眼で見た胎土の印象はほとんど変わらない。

瓦当文様の型式は平城宮式といわれるものに類似し、重弁10葉蓮華文軒丸瓦である。蓮子は1+6で、線鋸歯文縁となっている。瓦当文様の細部を見ると細かい木目が観察できる。裏面には布目が若干観察でき、丸瓦との接合はその痕跡から指ないしヘラ状の工具で行っている。断面を観察すると、まず文様中心部に粘土を貼りその後側面に粘土を充填し、さらに粘土円盤を貼っているように見える。丸瓦との接合をどの段階で行っているのかまでは分からないが、割れ方から見ると范型から瓦当面を外さずに丸瓦を接合していると考えられる。瓦当側面はヘラ状の工具で削っているように見える。



採集地点を指す得能武さん



採集地点の遠景

金沢市末窯跡群

採集地点から南側の丘陵にある末窯跡群は、金沢市の市街地から東南部、犀川と浅野川に挟まれた丘陵上に展開する窯跡群である。須恵器生産および土師器生産が行われていたことが知られている。須恵器窯跡は末・辰巳・浅川の3支群に大別され、25基程度分布していると考えられている。末窯跡群では8世紀中頃に須恵器生産が始まり、9世紀前半の内に終焉を迎える。土師器生産は9世紀後半までは続いていたと考えられている。

1951年に沼田啓太郎が須恵器を発見して以来、当埋蔵文化財センター調査部長小嶋芳孝による分布調査などが行われてきた。金沢平野の古代の開発を考える上で貴重であることは言われてきたが、周辺の開発により多数の窯跡がすでに消滅していると考えられている（北野1999）。

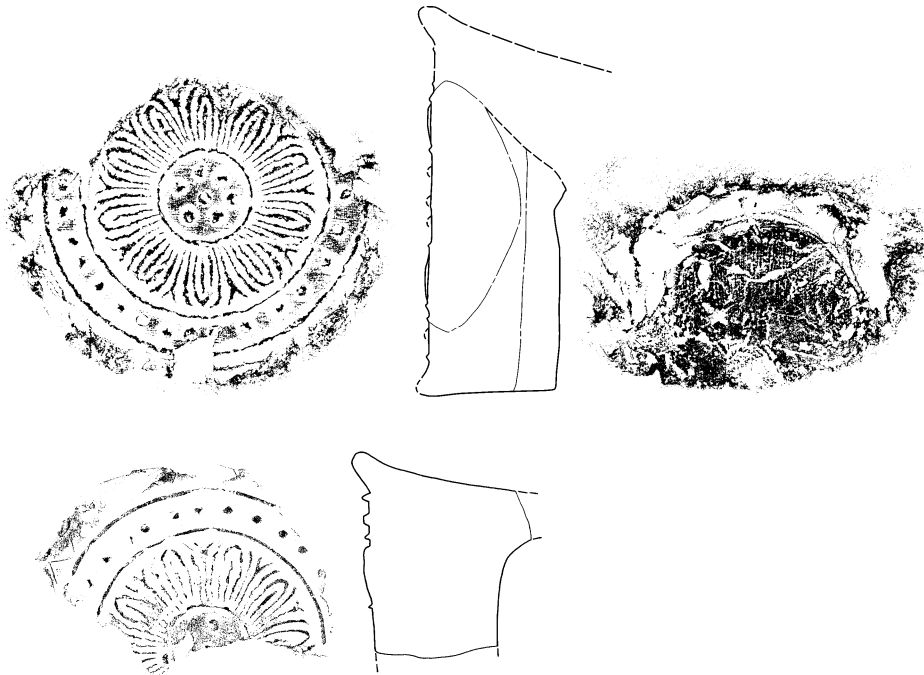
軒丸瓦が採集された地点は、浅川支群の北側にある。ちょうど浅川7号窯の北側にある谷から下の方に降りると採集地点に達する。浅川7号窯の製品であると言えるわけではないが、周辺から落下してきた可能性は十分にある。また瓦が最も多く散布しているSA-A地点からは、平城宮式の軒平瓦が採取されている。1986年に金沢市教育委員会により発掘調査された浅川3号窯でも瓦が出土している（出越1989）。

関連資料

金沢市・金沢市教育委員会が金沢21世紀美術館建設に伴い発掘調査を実施した広坂遺跡は、平成8～12・14年度に調査が行われた。遺構の大半は近世の武家屋敷に伴うが、他に中世の館跡と見られる遺構や、古代の遺構も検出されている。古代の遺構はそれら中・近世の遺構により破壊され、その詳細はあまりよく分かっていないようだが、竪穴建物・掘立柱建物・土坑・区画溝・柵列・瓦溜等が検出されている。瓦は大量に出土しており、古代寺院（広坂廃寺）があったことはほぼ間違いない。瓦の型式は藤原宮式・平城宮式であることから、白鳳時代末頃に創建されたと考えられている。藤原宮式は石川県内では初出であり、平城宮式の軒丸瓦も初めての出土であった。胎土から平城宮式のものとは末窯跡群産と考えられた（熊谷1997）。また、藤原宮式の瓦は胎土の特徴から、金沢市観法寺窯跡群で生産されたものと考えられている⁽¹⁾。

採集された瓦と広坂廃寺で出土したものと比較するために、金沢市埋蔵文化財センターで広坂廃寺の瓦を見せていただいた。広坂廃寺は、金沢市観法寺窯跡群産の製品を当初用いているが、その後金沢市末窯跡群の製品を用いて建物を建立していると考えられている。時期差はおおよそ20年あり、一度に伽藍全てを建立したのではなく、徐々に整備していったものと考えられている。また能美窯跡群





第2図 鉾子町採集軒丸瓦（上）と金沢市梅田B遺跡出土軒丸瓦（下）（S=1/3）

産の瓦や南加賀窯跡群産の瓦も出土しているが、これらには軒瓦はなく、補修瓦と考えられている⁽²⁾。

観法寺窯跡群から北に約1kmの所に金沢市梅田町B遺跡がある。この遺跡から末窯跡群産と考えられる軒丸瓦が出土している。報告済みのものと比較すると、ほぼ同範と考えてよいほど似通っている。ちなみに1997年の調査でも軒丸瓦は出土しており、まだ未報告だがこれも同範かもしれない。ほかにも観法寺窯跡群産のもの、南加賀窯跡群産と考えられる瓦が出土しており、寺跡があった可能性がある。

おわりに

鉾子町で採集された8世紀中葉の軒丸瓦1点は、末窯跡群で採集されたものではない。しかし、採集場所を考えると間違いなく末窯跡群産といって良く、同様の瓦当文様・胎土をもつ広坂廃寺、梅田B遺跡出土の瓦も末窯跡群産であることは疑いのないものになったいえる。

最後に、採集品を紹介するに際し快諾していただいた得能武さんに感謝いたします。

注

- (1) 金沢市埋蔵文化財センター出越茂和氏のご教示および観法寺瓦窯製品との対比による。
- (2) 金沢市埋蔵文化財センター出越茂和氏のご教示による。

引用・参考文献

- 柿田祐司ほか2004『梅田B遺跡Ⅱ』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司1999「末窯跡群」『金沢市史』資料編19考古 金沢市
- 楠正勝・庄田知充2004『石川県金沢市広坂遺跡（1丁目）』測量図編 金沢市埋蔵文化財センター
- 熊谷葉月1997「動向加賀」『北陸古代土器研究会』第7号 北陸古代土器研究会
- 谷口宗治2001『金沢市末古窯跡群Ⅱ』金沢市埋蔵文化財センター
- 出越茂和1989『金沢市末古窯跡群』金沢市教育委員会
- 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会

石川県における磨製石庖丁研究についての 現状と若干の考察

松尾 実

1. はじめに

石川県は日本列島の中央部、日本海に面した地域にあり、北方に突出した半島を有する。古来、南は旧加賀国、半島は旧能登国に属しており、凡そ2つの地域に大別できる。すなわち、加賀地域、能登地域であり、前者には白山系や医王山系の山地、後者には宝達山系や丘陵性の台地が連なっている。

弥生時代には、水田稲作農耕文化とそれに伴った大陸系磨製石器群^①が朝鮮半島から日本列島の北部九州へ渡り、東へ漸次波及して当該地域にも及んだと理解されている。特に、その文化波及と受容の展開を具体的に知る手がかりの1つとして、大陸系磨製石器群は注目をあびてきた。すなわち、社会変革などの断面的、かつ、流通論、社会構造などといった平面的な研究によって弥生時代の人的活動の有機関係にアプローチできる資料と考えられるからである。近年では、各地で精緻な検討と見直しが活発に行われ、製作工程の復元研究、使用痕による機能・用途の再検討、小地域における流通圏の存在などが明らかになっている。

ところで、石川県内でも石器資料の増加に伴い、1990年代から幾度となく集成が行われてきた。それらのなかでは、大陸系磨製石器群の導入、定着、消滅過程を言及した論考が少なくなく、一定の見解がなされている。また、使用痕による精緻な研究により、機能・用途についての再検討が行われている。しかし、生産・流通については、ほとんど言及されていないのが現状といえよう。

本稿では弥生時代の特質とされる水田稲作農耕に密接に関係し、かつ、生産・流通論に関して地域的な様相を示唆する磨製石庖丁^②を取り上げる。まず、石川県下における研究史を振り返り、整理を行いたい。そして、磨製石庖丁の石材に注目し、流通圏について若干の考察を行いたい。考察に際しては、主に対象地域を現在の石川県内を範囲とし、特に弥生時代で中期～後期にかけて長期的な継続期間を有した拠点集落とされる小松市八日市地方遺跡と羽咋市吉崎・次場遺跡、後期に盛行した金沢市西念・南新保遺跡を取り上げる。

2. 石川県における磨製石庖丁の研究史

1955年に鹿島郡御祖村（現：鹿西町小田中）から出土した石庖丁が石川県下において初出となるであろう^③。後に浜岡賢太郎氏によって石庖丁の特異性に注目し、農耕が行われた事を示唆した。また、吉崎・次場遺跡との関連性を示唆している^④。その後、石庖丁研究は停滞したが、1992年の埋蔵文化財研究会による全国的な集成作業を契機に躍進する。安英樹氏はそのまとめのなかで、製作技法よりも想定される用途を軸に石庖丁を農具の範疇に位置付け、各時期における傾向を把握した。すなわち、「中期前葉には石庖丁が存在する可能性を示唆し、中期後半から確実に存在する事で他の大陸系磨製石器群も含めて定着した。」と言及し、「西日本的な石器組成に極めて近くなる。」と評価している。そして、後期には減少傾向を示し、消失するとの見解を示した。これらの集成作業は石川県下でもはじめての総体的な集成であり、そのなかで石器形式、組成、時期別量的傾向などのデータを提示し一

定の見解を示した事は重要である⁽⁵⁾。また、1995年に安英樹氏は、羽咋市吉崎・次場遺跡の石器群資料を検討材料に中期から後期における石器群の推移を考察した。用途を穂摘具とした石庖丁は、「直刃半月型が多く、主体は研磨が雑な品で、大型が多い。」と指摘している。総括的な見解では、中期前半段階で全面研磨品は少なく、後期に大陸系石器群全体の石材に軟質が多くなる傾向を示唆された。また、打製の横刃石器、木庖丁に注目し、複合的な使用形態を想定する必要性を指摘した。さらに、「大陸系磨製石器を生産できる遺跡は北陸においてはかなり地域単位で限定される可能性が高い。確証はないが特定集落、おそらくは地域の中核的な集落での生産、周辺の集落への供給というような姿を推定しておきたい。」と周辺地域における社会構造を示唆した⁽⁶⁾。同年、久田正弘氏は収穫具として集成を行なった。変遷過程のなかで、石包丁はⅢ期から法仏期まで確認でき、消滅の要因に鉄器や木器に転換された可能性を示唆された⁽⁷⁾。1999年には、木田清氏が吉崎・次場遺跡出土資料から形態による変遷を論じた。最大幅をもって特大（11～15cm）、大（8～10cm）、中（5.5～8cm）、小（4～5cm）と類型化し、時系列な傾向を導出した上で、これらの規格差から用途が違うことを指摘した。すなわち、小型は穂摘具、中型は除草具兼穂摘具、それ以上の規格は除草具とし、使い分けを行ったと推定した。そして中期では特大～小までの種類が豊富であるのに対し、後期になると中型のみが残り消滅していく過程を言及し、大型品は使用頻度の低さによって消滅し、小型は木庖丁、大型は鉄器への転換を論じている。製作技法については、刃のつけ方、研磨の仕方に大小それぞれの差異はないと確認された⁽⁸⁾。2001年に安英樹氏は、北陸の拠点集落とされる吉崎・次場遺跡、八日市地方遺跡を例にとり、流通に関して示唆に富む見解を示している。これら遺跡を物資の生産力が高い遺跡として評価している。そして、「原料などを遺跡外から遠隔地・近郊地を問わず確保し集積する機能が高かった」、「遺跡内で土・石・木などを素材とする製品の生産力が高い。おそらくは、原材料を遺跡外から獲得・集積し、完成品は遺跡外へ供給するといった生産・流通機能が備わっていたと想定される」と言及し、主に水系で結ばれたネットワークを介したと想定した⁽⁹⁾。2002年、久田正弘氏は、使用痕研究から磨製石庖丁の用途を石製収穫具として位置付け、形態幅と使用痕の組み合わせからその機能について論じた。すなわち、小型のものは刃に直交する形で片側に使用痕があり、穂摘みを行ったと推定し、それ以外のものは刃に対し平行で幅広い使用痕があることから横に引いて切断したと推定した。また、石川県では穂摘具は少なく、穂刈ないし根刈りの収穫具が多く確認できる状況を示している。なお、大～特大型といわれる石庖丁については、オシギリ的に使用された農具との視点を提示しており興味深い⁽¹⁰⁾。2003年には宮田明氏が詳細な遺物の検討を行った。層状に剥離した板状薄片を素材として一辺に刃部を有する石器全てを「石庖丁」とした。一方、石庖丁未成品についても言及している。一見打製石庖丁の一種と考えられるものでも使用痕が観察されない等の観察から刃部加工途上の石庖丁未成品の破損品として認識されており、従来の打製石庖丁の認識を改める必要性を提起している。また、成品の平面形態は台形～半月形が多いが、石庖丁が破損しても使用している事例を紹介している。石材に関しては、流紋岩類が最も多く、他に珪質頁岩や粘板岩のような堆積岩系の石材が多いと報告されている。なかでも、流紋岩（層状の石理が発達して板状に剥がれやすい石材）は、産出地を山中地域と推定されている⁽¹¹⁾。

以上の磨製石庖丁研究史から看取される現状についてまとめてみたい。

- ・ 時期的な変遷過程については、磨製石庖丁が中期には確実に出現し出土量も多い。規格は多様化するが、後期になると衰退し消滅する。この頃には規格も少なくなるようである。その要因を穂摘具・収穫具が鉄器や木庖丁へと転換した事象として捉えられている。
- ・ 機能・用途については、使用痕研究によって機能を精緻に検討し、農具→穂摘具→収穫具へと認

識されている。また、5 cm以下の小型は穂摘み具、5.5～8 cmの中型は穂摘具兼除草具(収穫具)、中型以上も収穫具といった規格による類型化がなされている。

- ・生産・流通については、石庖丁の然るべき石材獲得のための露頭、石材の薄片、多くの未成品が出土する遺跡が未発見なため、積極的に言及されている論考は多くないのが現状といえよう。しかし、他の石材に関しては一定の範囲が認められている。例えば、大陸系磨製系磨製石器群の一つである太型蛤刃石斧については、吉崎・次場遺跡で未成品が出土していることから、生産地として考えられており、そこから広範囲にわたる供給が想定されている。他に、能登地域の富来周辺を産地として想定されている輝石安山岩は主に石鏃石材で、弥生時代に限れば長期間に亘って広範囲に流通されている⁽¹²⁾。また、手取川流域を産地とする安山岩は主に打製石斧などの石材とされ、手取川扇状地を中心として流通している⁽¹³⁾。富山県東部を産出地として推定されている蛇紋岩は、主に石斧石材として流通している。近年では小松市八日市地方遺跡出土の石器石材の一つである流紋岩の生産地は山中地域を推定されている。
- ・社会構造については、地域における中核的な集落が生産を行い、周辺の集落への供給するシステムを想定されている。

3. 石川県下における磨製石庖丁からみた流通圏について

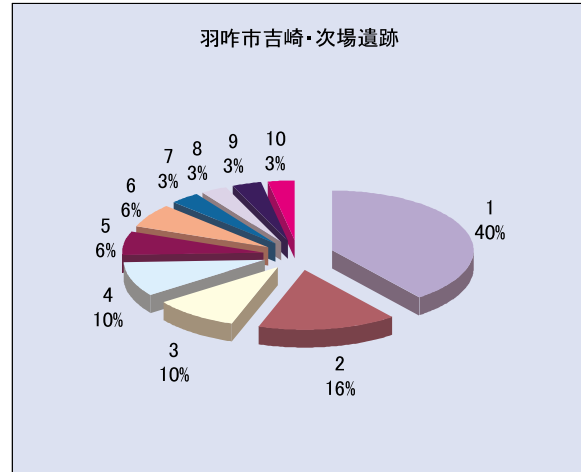
このように、磨製石庖丁研究は時期的な変遷課程での量的傾向の把握や機能・用途について着実に進歩している。しかし、生産・流通論は、資料の制約があるためか活発な議論が多くなされていないのが現状であろう。そのなかでも、安英樹氏による拠点集落論のなかでの「遺跡内で土・石・木などを素材とする製品の生産力が高い。おそらくは、原材料を遺跡外から獲得・集積し、完成品は遺跡外へ供給するといった生産・流通機能が備わっていた。」と想定し、主に水系で結ばれたネットワークを介したとする論考⁽¹⁴⁾は重要である。この仮説を基として以下ではこれらの生産・流通に関わる流通圏について若干の検討を行いたい。

石器石材の流通形態は多様であることが考えられ、石鏃や石斧などのように遠隔地から広範囲にわたって流通したものが認められる。また打製石斧のように採取地を中心にした比較的狭い範囲での流通圏も認められる。この点に注目して大陸系磨製石器群のなかでも比較的数量のある磨製石庖丁を取り上げ、どのような流通形態が見られるのかを考察したい。まず、加賀地域と能登地域といった範囲で流通圏があるのかどうかを検討するために、その前提作業として八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡出土のデータ⁽¹⁵⁾を基にして石材の傾向を割り出し、両遺跡を比較する。検討対象とする遺跡を2つにしぼったのは、中期から後期の長期間に亘って集落が営まれていたこととその規模の大きさである。そして、2遺跡の資料点数が多いことに起因する事と、加賀、能登地域における中核的な拠点集落の様相を示しているためである。なお、北加賀地域で後期に盛行した拠点集落とされる西念・南新保遺跡も検討対象に加える。

八日市地方遺跡では、磨製石庖丁出土総計80点中、流紋岩38%、粘板岩26%、珪質頁岩13%、凝灰岩13%が主な石材構成で、6：3：1：1という比率を表しており、流紋岩系・粘板岩系の石材が多い。石材については、総じて節理(層状の石理)のある加工しやすい石材を志向する傾向があることを指摘する。生産地としては、手取川流域と山中地域などが想定され、遠隔地から石材を入手していないことが窺える。中には、素材、未成品、穿孔途中、完成品といった製作工程を追える資料があり、磨製石庖丁の製作を行っていたと考えられる。

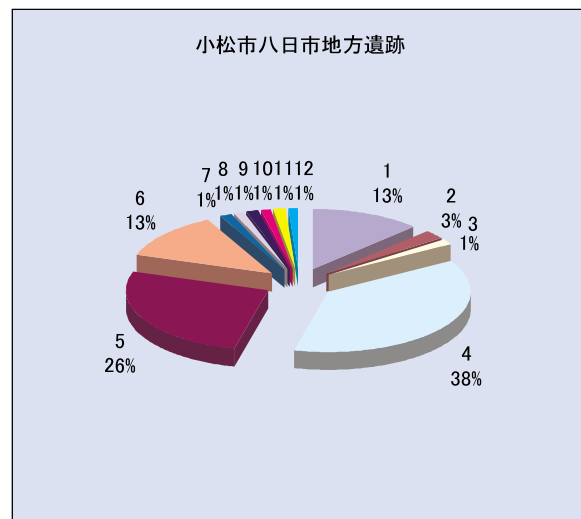
羽咋市吉崎・次場遺跡

	石材の種類	数量	構成比
1	角閃石安山岩	12	40%
2	安山岩	5	16%
3	砂岩	3	10%
4	輝石安山岩	3	10%
5	粘板岩	2	6%
6	シルト岩	2	6%
7	白色凝灰岩	1	3%
8	千枚岩	1	3%
9	片麻岩	1	3%
10	不明	1	3%
	合計	31	100%



小松市八日市地方遺跡

	石材の種類	数量	構成比
1	珪質頁岩	10	13%
2	安山岩	2	3%
3	火山礫凝灰岩	1	1%
4	流紋岩	30	38%
5	粘板岩	21	26%
6	凝灰岩	10	13%
7	玻璃質岩	1	1%
8	砂岩・頁岩	1	1%
9	凝灰質砂岩・頁岩	1	1%
10	玉随・瑪瑙・チャート	1	1%
11	輝石安山岩	1	1%
12	不明	1	1%
	合計	80	100%



*未製品は含まず。 * 1～3は、手取川流域で採取される石材
 4～10は、加賀南部の山間部で採取される石材
 11は、外来石材

金沢市西念・南新保遺跡

	石材の種類	数量	構成比
1	凝灰岩	4	67%
2	凝灰岩質流紋岩	1	17%
3	流紋岩質砂岩	1	17%
	合計	6	100%

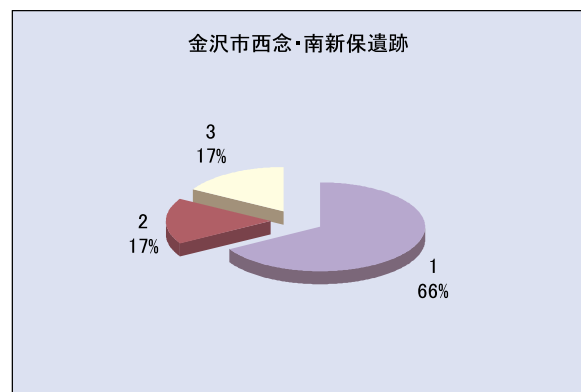


図1 拠点集落石材別構成比
 (木田：1999、影山：2001)を基に作成

吉崎・次場遺跡では、磨製石庖丁出土総計31点中、角閃石安山岩40%、安山岩16%、砂岩10%、輝石安山岩10%が主な石材構成で、4：2：1：1という比率を表している。当該遺跡では、角閃石安山岩の比率が高い。節理のある石材をほとんど志向していない傾向を示す。その他の石材を実見しても、八日市地方遺跡の石材と様相を異としている。角閃石安山岩は、羽咋の海岸地域他を採取地として想定されており、これも遠隔地から石材を入手していないことが窺える。成品が多く見られるが、報告書掲載外の石器を含めて再検討する必要がある。

西念・南新保遺跡は、磨製石庖丁出土総計6点中、凝灰岩が67%、凝灰岩質流紋岩17%、流紋岩質砂岩17%が主な石材構成で、4：1：1の比率となる。これらは、他遺跡と比較して軟質で節理のある凝灰岩が多いのに注目したい。なお、凝灰岩産地の一つとして想定するならば、森本丘陵⁽¹⁶⁾を主とする医王山山系の可能性を考えたい。

これらの拠点集落における石材構成の特徴と各遺跡出土の石材から勘案すると、大きく2つの流通圏があることが考えられる。すなわち、能登地域と加賀地域である。前者は節理のない石材、後者では節理のある石材を用いて磨製石庖丁を製作したことが窺え、志向したと考えられる。また、石材比率を見ると近隣で採取される石材が多くを占めていることが分かる。つまり、磨製石庖丁に関しては、特定の石材が遠隔地から搬入されて用いられたとは考え難く、近隣から採取されたと考えられる。

以上の検討から、磨製石庖丁は特定の石材を遠隔地から搬入するような石材の志向性は看取されない。むしろ、加賀、能登地域内において石材の採取地があり、小地域内⁽¹⁷⁾での流通圏が構築されたと考えられる。さらに、その流通圏を基礎単位とする多様な需要・供給関係を有したネットワークが構築されたと想定したい。ただし、両遺跡には微量に相互の石材があることは、小地域間の流通システ

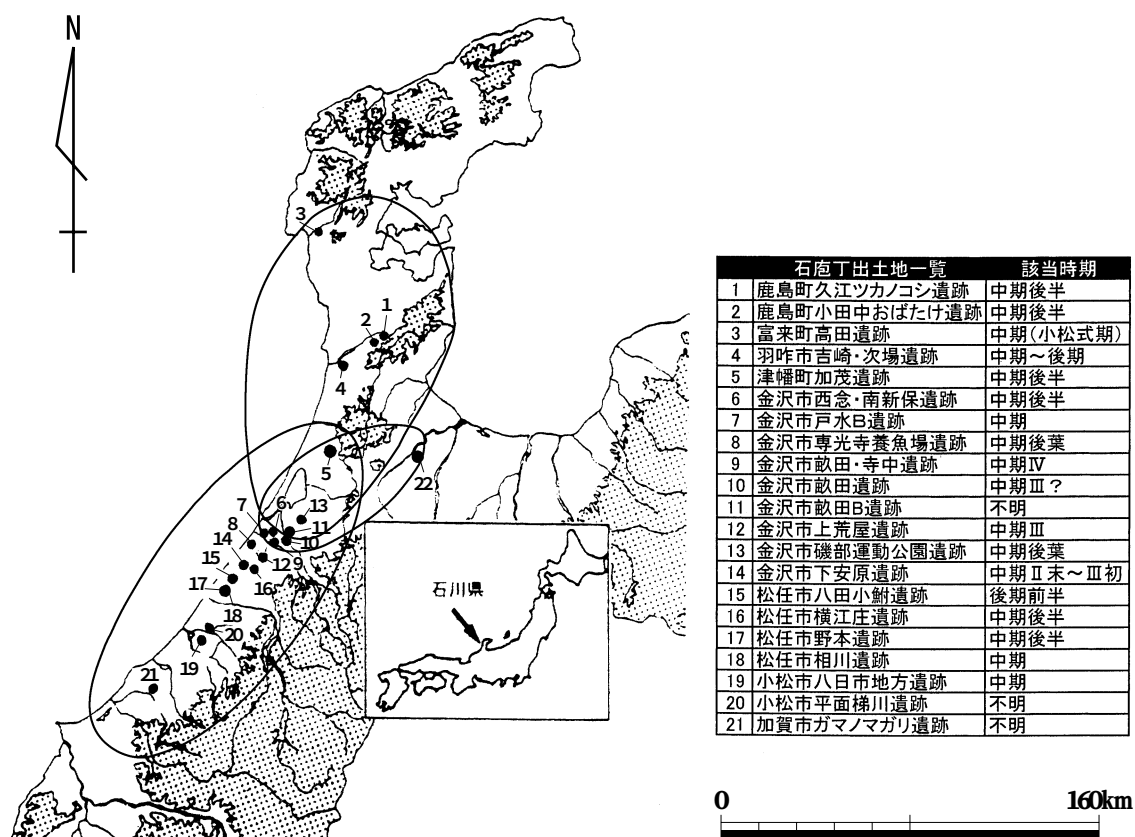


図2 磨製石庖丁流通圏想定図

ムが機能したと考えられる。そこには中心的な役割を担う拠点集落の存在が機能していた可能性を考える。

さらに、今回の検討によって新たな知見を提示したい。西念・南新保遺跡出土の磨製石庖丁の石材に凝灰岩が多いことに注目し、他遺跡出土の石材を実見したところ、金沢市磯部運動公園遺跡、同市戸水B遺跡（穿孔途中品）、同市畝田B遺跡、津幡町加茂遺跡等⁽¹⁸⁾から出土している。白色系凝灰岩を石材とする磨製石庖丁は北加賀地域において散見されることから、これらを包括した一つの流通圏があったと考えられる。さらに、富山県下老子笹川遺跡においても出土していることから、この石材の流通圏は富山県西方に位置する砺波平野にまで広がることを示唆しており、広範囲にわたっていた可能性がある⁽¹⁹⁾。すなわち、白色系凝灰岩の石材が加賀地域のなかでも北加賀地域を中心として砺波平野にまで及ぶ広範囲の流通圏があることを指摘する。なお、戸水B遺跡出土の穿孔途中品について勘案すると、拠点集落で成品化したものを周辺集落へ供給する流通形態の他に未成品を流通圏の内外を問わず供給し、需要した集落で成品化した可能性も考えられる。

流通圏は、多様で複雑に重なっていると認識している。特筆したいのは、石川県下での石材の流通圏が、安山岩等を主とする能登地域、流紋岩、粘板岩等を主とする加賀地域・凝灰岩等を主とする北加賀地域の3つの流通圏が確実に重なり合って存在していたことが看取されることである。このことは、大陸系磨製石器の導入・定着するに際して、少なくとも中期後半には石材の供給・需要ルートが構築されていたことを傍証すると考えられる。ただし、石材はその種類によって選択がなされていたと考えており、多様な生産・流通ルートがあったと考えている。

4. おわりに

本稿では弥生時代における磨製石庖丁について、石川県での研究史を振り返って整理を行った。

また、強引な論の展開ではあるが、磨製石庖丁を切り口に流通圏が加賀、能登地域と大きく括られ、新たに北加賀地域にも流通圏のあることを指摘した。今後、他の種類の石器を検討することによってより多様な形態が導出できると考える。

近年、各地で詳細な検討がなされてきており、飛躍的に研究が進展している。今後、製作工程や穿孔形態のあり方を視野に入れた整理を行い、消費地から見た石材の流通を再検討する必要がある。このことは、磨製石庖丁に限った事ではなく、他の種類にもいえよう。

最後に、本稿に際し、以下の方々にご教示いただいた。記して感謝の意とします。

荒川和哉、伊藤雅文、大野淳也、戸谷邦隆、仲原知之、西森正晃、久田正弘、藤 則雄、町田勝則、町田尚美、宮田 明、業天唯正、安 英樹、和田龍介

註

1. 大型蛤刃石斧、磨製石庖丁、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、磨製石剣等の石器群を便宜的に総称するのに用いた。
2. 他の資料は資料的な制約があり、磨製石庖丁は他よりも数量がある。また、打製石庖丁とされる形式については今後整理される必要性があるため、本稿では検討対象外とした。
3. 石川考古学研究会編 1955 「資料点描 20」『石川県考古学研究会会誌』第7号 石川考古学研究会
4. 浜岡賢太郎 1956 「鹿島郡御祖村石庖丁出土遺跡略報」『石川考古学研究会会誌』第8号 石川考古学研究会
5. 埋蔵文化財研究会編 1992 「第31回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の石器—その始まりと終わり」 埋蔵文化財研究会
6. 安 英樹 1995 「北陸の大陸系磨製石器」 月刊考古学ジャーナル No. 391 ニューサイエンス社
7. 久田正弘 「石川県の石器」『農耕開始期の石器組成4 中部・近畿』国立歴史民俗博物館資料調査報告書7

国立歴史民俗博物館

8. 木田 清 1999 「石製穂積具」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具』 石川考古学研究会
9. 安 英樹 2001 「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
10. 久田正弘 2002 「北陸地方における農具と使用痕」『第7回石器使用痕研究会 弥生文化と石器使用痕研究～農耕に関わる石器の使用痕～』 石器使用研究会・大阪府弥生文化博物館
11. 小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡発掘調査報告書』
資料の実見に際し、宮田明氏により便宜を図って頂き、示唆に富むご教示をいただいた。
12. 安英樹氏よりご教示いただいた。
13. 戸谷邦隆氏よりご教示いただいた。
14. 同註9文献
15. 同註8文献
景山和也 2001 「収穫具」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 補遺編』 石川考古学研究会
16. 藤則雄氏よりご教示いただいた。
17. ここでは大きく加賀地域と能登地域と便宜的に分ける。
18. (財) 石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2004 『戸水 B 遺跡 (10・12・13次) 発掘調査報告書』
(財) 石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会 2003 『畝田・無量寺遺跡、畝田 B 遺跡発掘調査報告書』
松尾 実 2004 「津幡町 加茂遺跡 (第9次) の調査 ―弥生時代の建物跡群を中心に―」 平成15年度発掘速報会『よみがえる石川の遺跡』資料 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
19. 上田尚美 1998 「富山県内の石庖丁について 一下老子笹川遺跡出土の新資料から」『富山県考古学研究』創刊号 (財) 富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所
資料の実見に際し、荒川和也氏、町田勝則氏、町田尚美氏には、便宜を図って頂き、多くのご教示をいただいた。
そのなかで、当該資料が鹿西町小田中遺跡出土の石庖丁の石材と同質という点について関係性が認められないことが判明しており、今後検証すべき課題である。

〔図版出典〕

図1：(木田；1999、景山；2001)を基に作成

図2：(安；2001)を基に加筆・修正

〔参考文献〕

- 森本六爾 1936 「石庖丁の諸型態と分布」『考古学評論』第1巻第1号 東京考古学会
 小林行雄 1937 「石庖丁」『考古学』第8巻第7号 東京考古学会
 石川考古学研究会編 1955 「資料点描 20」『石川考古学研究会会誌』第7号 石川考古学研究会
 浜岡賢太郎 1956 「鹿島郡御祖村石庖丁出土遺跡略報」『石川考古学研究会会誌』第8号 石川考古学研究会
 石川県鹿島町史編集専門委員会 1966 「石川県鹿島町史 資料編」 石川県鹿島町役場
 石毛直道 1968 「日本稲作の系譜 (上)」『史林第51巻』第5号 史学研究会
 石毛直道 1968 「日本稲作の系譜 (下)」『史林第51巻』第6号 史学研究会
 橋本澄夫編 1970 「石川県考古学便覧」I 北国出版社
 酒井龍一 1974 「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究21-2』考古学研究会
 下条信行 1975 「石器の製作と技術」『古代史発掘』4 講談社
 酒井龍一 1984 「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』3 奈良大学文学部文化財学科
 酒井龍一 1985 「磨製石庖丁」『弥生文化の研究』5 雄山閣出版
 酒井龍一 1986 「石材の動き」『弥生文化の研究』7 雄山閣出版
 都出比呂志 1989 「日本農耕社会の成立過程」 岩波書店
 平井 勝 1991 「弥生時代の石器」(考古学ライブラリー64) ニュー・サイエンス社
 菅 栄太郎 1992 「弥生時代の石器生産と流通 ―讃岐平野における一様層と近畿地域との関連性」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
 松山 聡 1992 「石庖丁の使用痕」『大阪文化財研究』第3号 (財) 大阪文化財センター
 埋蔵文化財研究会関西世話人編 1992 「第31回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の石器―その始まりと終わり」 埋蔵文化財研究会関西世話人
 村田幸子 1992 「畿内における石庖丁未成品の分析」『大阪文化財研究』第3号 (財) 大阪文化財センター

- 村田幸子 1992 「石材の伝播について―河内平野を中心に―」『河内平野遺跡群の動態』Ⅴ 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 禰宜田佳男 1992 「大阪府の弥生時代後期の石器」『究班』 埋蔵文化財研究会
- 安 英樹 1995 「北陸の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』391 ニューサイエンス社
- 設楽博己 1997 「弥生時代の交易・交通」『考古学による日本歴史』9 雄山閣出版
- 秋山浩三・仲原知之 1998 「近畿における石庖丁生産・流通の再検討(Ⅰ)―池上曾根遺跡の石庖丁製作工程―(上)」『大阪文化財研究』第15号 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 上田尚美 1998 「富山県内の石庖丁について ―下老子笹川遺跡出土の新資料から―」『富山考古学研究』創刊号 (財)富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所
- 禰宜田佳男 1998 「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』 角川書店
- 秋山浩三・仲原知之 1999 「近畿における石庖丁生産・流通の再検討(Ⅰ)―池上曾根遺跡の石庖丁製作工程―(下)」『大阪文化財研究』第17号 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 高木芳史 1999 「畿内地方の石庖丁の生産と流通」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室
- 鈴木敬二 1999 「穂積具の多様性と石材の流通 ―兵庫県玉津田中遺跡におけるケーススタディー」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室
- 仲原知之 2000 「和泉地域の石庖丁生産と流通 ―近畿における石庖丁生産・流通の再検討(Ⅱ)」『洛北史学』第2号 洛北史学会
- 寺沢 薫 2000 「日本の歴史02巻 王権誕生」 講談社
- 安 英樹 2001 「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 秋山浩三 2002 「石庖丁素材 池上曾根遺跡」「石庖丁製作途中品 池上曾根遺跡」『摂河泉発掘資料精選』Ⅱ (財)大阪府文化財センター
- 仲原知之 2002 「弥生前期の石庖丁生産と流通 ―近畿における石庖丁生産・流通の再検討(Ⅲ)」『紀伊考古学研究』第5号 紀伊考古学研究会
- 北条芳隆・禰宜田佳男編 『考古資料大観』第9巻 小学館
- 濱野俊一 2002 「三島地域における石庖丁生産と流通 ―大阪府茨木市目垣遺跡における石庖丁生産問題からの二、三の提起―」『古代学研究』 古代学研究会
- 久田正弘 2002 「北陸地方における農具と使用痕」『第7回石器使用痕研究会 弥生文化と石器使用痕研究～農耕に関わる石器の使用痕～』 石器使用研究会・大阪府弥生文化博物館
- 秋山浩三 2003 「弥生時代・畿内石庖丁の生産と流通 ―近畿における石庖丁生産と流通の再検討(Ⅳ)―」『道具の生産流通と地域間系の形成～縄文から弥生まで～』古代学協会中国四国合同大会研究発表要旨
- 荒井 格 2003 「東北地方出土石庖丁の製作工程と石材選択」『日本考古学』第15号 日本考古学協会
- 石川県小松市教育委員会編 2003 「八日市地方遺跡Ⅰ」第2分冊(遺物報告編) 小松市教育委員会
- 中川和哉 2003 「近畿地方における粘板岩製石器の生産と流通に関する予察」『同志社大学考古学シリーズⅧ 考古学に学ぶ(Ⅱ)』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 三浦知徳 2003 「石材の「選択」―価値観と指向性」『認知考古学とは何か』 青木書店

石川県埋蔵文化財情報
第12号

発行日 2004(平成16)年8月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター